

# 世界諸言語のキョウダイ名

## —その多様性と普遍性—

松本克己

キーワード： 類型論、親族名称、性差型キョウダイ名、環太平洋、  
環日本海諸語

### 1 はじめに

ここで「キョウダイ」というのは、同じ親を共有する同世代親族の総称で、ほぼ英語の *sibling* に相当する。このキョウダイの名称は「父」「母」「息」「娘」と共に、諸言語における親族名称の核心をなすものであるが、父・母や息・娘の場合と違って、その名称法は言語によって相当な違いがある。

たとえば、現代日本語のキョウダイ名はアニ・アネ・オトウト・イモウトの4種類で、その構成は本人から見た年齢差と相手の性別に基づいている。しかし同じ日本語でも、方言レベルで眺めると必ずしも一様でない。日本の本土を離れて、たとえば八丈島の方言では基本的なキョウダイ名は3種類で、本土方言の兄と姉に対してはそれぞれアシーとインネという名称があるけれども、年下の弟・妹に対してはキョーデアという1種類の名称しかない(杉村 1978)。一方琉球の諸方言を見ると、ここでのキョウダイ名は基本的に4種類であるが、その構成は本土の日本語と全く異なる。すなわち、ここで重要な区別はまず本人から見た性差、つまり同性か異性かという関係である。そして同性のキョウダイに対してはさらに年齢差による区別が生じ、一方異性のキョウダイに対しては相手の性別が関与して、「男性から見た女キョウダイ」と「女性から見た男キョウダイ」が区別される。この4種のキョウダイ名は、現代語ではかなりの地域差が見ら

れるので<sup>1</sup>、その源となっている古典沖縄語の形で表すと次のようになる(沖縄古語大辞典 1995)。

seza「同性の年上キョウダイ」～ otozja/ototo「同性の年下キョウダイ」

wonari「男性から見た女キョウダイ」～ wekere「女性から見た男キョウダイ」

一方、日本列島の北方で古くから話されてきたアイヌ語のキョウダイ名は、一見すると本土日本語と同じ4分類のようであるが、正確には一致しない。というのは、日本語の「妹」にあたる名称に実は2種類あって、「男性から見た妹」と「女性から見た妹」が明確に区別される。たとえば、現代沙流方言のキョウダイ名は次のようである(田村 1996)。

yup「兄」～ sa「姉」～ ak「弟」

matapa「男性から見た妹」～ matak「女性から見た妹」

次に日本列島に向かい合う朝鮮半島に目を向けると、現代朝鮮語のキョウダイ名はかなり動揺的で一義的な解釈が困難であるが、たとえば梅田(1991)で示されたキョウダイ名は次の5つの名称からなっている。

hyeong「男性から見た同性・年上」～ eonni「女性から見た同性・年上」

nuuna「男性から見た異性・年上」～ oppa「女性から見た異性・年上」

donsaeng「年下キョウダイ」

これを見ると、朝鮮語のキョウダイ名は年下側に1種類の名称しかないのに、年上側には性差と性別が絡んだ4種類の名称を区別するという複雑な構成である。しかしこのキョウダイ名は、それぞれ男性話者と女性話者の側から見ると、次のような形となって、これは八丈島型のキョウダイ名が男女間で別々の名称法をとっていると見ることできる。

hyeong「兄」 nuuna「姉」 oppa「兄」 eonni「姉」

donsaeng「年下」 donsaeŋ「年下」

【男性話者】

【女性話者】

最後に朝鮮半島の北方、アムール川の下流域から対岸のサハリン島に分布するギリヤーク語のキョウダイ名は、基本的に5種類であるが、その構成はアイヌ語とも朝鮮語とも異なり、次のような形をとっている(服部 1967、クレイノヴィッチ 1993)。

<sup>1</sup>現代琉球諸方言のキョウダイ名とその分布については、中本(1981:108ff.)を参照。

akkan「兄」～ nanak「姉」～ ask「年下キョウダイ」  
 ranř「男性から見た女キョウダイ」～ kioq「女性から見た男キョウダイ」

このキョウダイ名は、見たところ八丈島と琉球語の体系がいわば抱き合わせになった形である。

以上瞥見したように、日本列島とその周辺ではキョウダイの名称法が言語ごとに全部異なり、ひとつとして同じ体系が見られない。一方、同じユーラシアでもその西側に位置するヨーロッパを見ると、そこで話されているほとんどすべての言語は、たとえば英語の

brother「男キョウダイ」～ sister「女キョウダイ」

に見るように、そのキョウダイ名は一律に相手の性別による2種類の名称からなっている。ヨーロッパにおけるこの画一的・等質的な状況とひき比べて、日本列島周辺部に現れたキョウダイ名の多様性はまさに驚くべきとしか言いようがない。このような多様性は一体どのようにして生じたのか、またそれは人類言語におけるキョウダイ名の在り方とどのように関わっているのか。

以下の小論はこのような問いを出発点として、それに何らかの解答を与えるために、世界諸言語におけるキョウダイ名の現れ方、より具体的には、そのあり得べき多様性の幅と地理的・語族的な分布の様相を可能な限りグローバルに考察し、人類言語のいわば「キョウダイ名の類型論」を構築しようとするものである<sup>2</sup>。

## 2 世界諸言語に見られるキョウダイ名のタイプ

一般に親族名称は、かつて構造意味論者たちの主張を引き合いにするまでもなく、ある一定の意味成分ないし識別特性の組み合わせとして定義で

<sup>2</sup>この研究を進める中で、下記の方々から専門とする諸言語について貴重な助言や資料を頂いた。ここに記して心から感謝の意を表したい。

大江孝男(朝鮮語)、風間伸次郎(ツングース語)、小泉保(ウラル語)、土田滋(オーストロネシア語)、中川裕(アイヌ語)、峰岸真琴(オーストロアジア語)、宮岡伯人(エスキモー語)、藪司朗(チベット・ビルマ語)

また、アジア・アフリカ言語文化研究所から刊行された数多くの諸言語の辞書、基礎語彙集について筆者からの寄贈依頼の申し出に快く応じて下さった同研究所共同利用係の方々、また親族名称関係の文献探査や雑誌論文のコピーに協力してくれた筑波大学の佐々木冠君にも深く感謝する。

きる。ここでの対象であるキョウダイ名の場合、それを成立させる基本的な意味成分は、次の3種とされる。

- (1) 本人から見た年齢差 = 年上 ~ 年下
- (2) 相手の性別 = 男性 ~ 女性
- (3) 本人から見た性差 = 同性 ~ 異性

このほかに、たとえば同母 ~ 異母、同父 ~ 異父の違いによる「完全キョウダイ」と「半キョウダイ」、あるいは年上 ~ 年下という相対年齢だけでなく、たとえば現代日本語で「長兄」「次兄」「末弟」(古い日本語で「大兄(オオエ)」「中兄(ナカノエ)」)のような年齢の絶対的の序列がキョウダイ名の区別に関与することもある。しかし、このような区別は一般にキョウダイ名の副次的な成分として加わることはあっても、それを基本的な構成原理とするようなキョウダイ名は全く知られていない。

なお、3番目の性差の関与するキョウダイ名は、実際の言語使用の面から見ると必ず話者の男女差と結びついている。たとえば先に挙げた琉球語の場合、*seza* は男性話者が使えば「兄」を、女性話者が使えば「姉」を指し、また朝鮮語のキョウダイ名もこのような話者の男女差が絡んでいる。性差と話者の男女差は、従って、實際上重なることが多いけれども、厳密には両者は同じではない。それがどのように違うかは後に触れよう。

現在筆者の手許には、世界諸言語のキョウダイ名に関して1,500近い言語のデータがある<sup>3</sup>。これらはもちろん地域や語族に関して完全に均等というわけではなく、とくにニューギニアを中心とするパプア諸語や南米大陸の諸言語についてのデータは貧弱である。しかし、これまで諸学者によって提示されたキョウダイ名のデータとしては、量的にはおそらく最も豊富であり、ここから人類言語のキョウダイ名の在り方に関してある程度の一般化と推論を導くことは十分可能と思われる<sup>4</sup>。

<sup>3</sup>このデータの内訳については、論文末別表【キョウダイ名タイプの地域・語族分布】参照。なお、本稿では紙数の関係で諸言語のキョウダイ名の例示とその出典への参照は最小限にとどめた。これらのデータの詳しい例証や諸地域におけるキョウダイ名タイプの分布図の提示は別の機会に譲らなければならない。

<sup>4</sup>キョウダイ名に関するこれまでの世界規模のデータの収集とそれに基づくタイプ分類の試みとしては、世界139言語の親族名称を網羅したMorgan(1871)を嚆矢として、その後Nerlove & Romney(1967), Murdock(1968, 1970), Kronefeld(1974)などがある。この中でMurdock(1968)は約800社会のデータを集めたとされる。しかし人類学者の社会とわれわれの言語はもちろん一致せず、Murdock論文末に挙げられた社会ないし部族名

以下、世界諸言語に実際に検証されるキョウダイ名について、それをタイプ別に分類してみよう。主要なタイプはおよそ12種を数える<sup>5</sup>。なお、以下で「基本的なキョウダイ名」とされるのは、原則として、単一の語彙項目からなる指示名称 (reference term) であり、呼びかけ語ないし呼称 (address term) は、とくに必要でない限り、考慮外とする。

## 2.1 中立1項型 (= A型)

これは基本的なキョウダイ名として、中立・総称的な名称を1個しかもたない構成としては最も単純なタイプである。これを中立1項型 = A型と名付けよう。

年齢、性別などに関して中立的なこのような名称は、実は世界諸言語の多くのキョウダイ名の中で、たとえば日本語のキョウダイのように、別の固有なシステムと共存し、単に総称ないし集合名としてだけでなく、必要に応じて適当な識別標識をつけることによって、たとえば日本語の男キョウダイ、女キョウダイのように、固有のシステムとは違ったタイプの名称を作るために用いられる。つまりA型キョウダイ名は、必要に応じてどのような名称も創出できるという点でいわば融通無碍のタイプであるが、これが人類言語のキョウダイ名としてはたして正常なタイプかどうかは疑わしい。

このタイプと見られるキョウダイ名は、手許のデータで83例を数えるが、その現れる地域と言語はきわめて限られている。それが最も数多く現れるのは、アフリカのニジェール・コンゴ語圏の周辺部(とくにコルドファン諸語、ギニア湾沿岸部の西アフリカ諸言語)とオーストロネシア語族の中のフィリピン諸語である。これらの言語のキョウダイ名は、後に見るように、本来別のタイプに属していた。問題のA型キョウダイ名は、こ

から筆者の世界言語データベースならびに *Ethnologue* 13th ed. (= Grimes 1996) によって確認された言語の数は500あまりである。Murdock (1968) のキョウダイ名タイプの分類は簡明であるが、性差の関与するキョウダイ名の分類がきわめて曖昧で役に立たない。さらにデータも不正確で、先に見た日本列島周辺部のキョウダイ名の分類を見ても大方間違っている。一方 Murdock (1970) ではデータ数は566となり、分類法も全く別の方式が採用され、キョウダイ名のタイプは全部で24類43種に分類されたが、機械的に細分化されすぎ、人類言語のキョウダイ名の在り方に関してここからは何も見えてこない。

<sup>5</sup>以下キョウダイ名タイプのアルファベットの振り当ては、簡明な Murdock (1968) のそれにほぼ準ずる。

これらの言語の古いキョウダイ名が崩壊して全く別の体系へ再編されるとい  
う特殊な状況、とくに、年齢差を主体とするキョウダイ名が性別を主体と  
する方向へ移行するという形で現出しているように見える。

たとえば、フィリピン諸言語のキョウダイ名は、全般的には次に挙げる  
年齢2項型が最も優勢であるが、その中の比較的話者人口の多い有力言  
語(たとえば、タガログ、セブアノ、ヒリガイノン、カパンパンガン、イ  
フガオなど)で、現在このような中立1項型が現れている。これはこれら  
の言語で自然に起こった変化というよりもむしろ、年齢型キョウダイ名か  
らスペイン語や英語を通して入ってきた性別型への変更を余儀なくされ  
た結果と見てよいだろう。たとえばタガログ語の *kapatid* 「キョウダイ」  
(原義は「絆」)は、それだけで単独に使われるよりも、むしろスペイン  
語の *hermano* ~ *hermana*、英語の *brother* ~ *sister* の「翻訳借用」として  
*kapatid na lalaki* 「男・キョウダイ」~ *kapatid na babae* 「女・キョウダ  
イ」という形で用いられるのが普通である<sup>6</sup>。

後に見るように、年齢型と性別型キョウダイ名の間には共通項が全くな  
く、既存のシステムを一旦壊さなければ一方から他方への切り替えはでき  
ない。中立1項型は、あらゆる言語のキョウダイ名に潜在的に備わった中  
立・総称的名称が、既存のシステムがいわば解体されたとき、たまたま表  
面に姿を表したものであり、アフリカやオセアニアの諸言語でそれは多く  
の場合、“偽装された”性別2項型という性格を帯びている。

## 2.2 年齢2項型 (= B型)

次に挙げられるのは、本人から見た年齢差(年上~年下)を唯一の識別  
特性として、「年上キョウダイ」~「年下キョウダイ」という2種の名称  
からなるキョウダイ名で、これを年齢2項型 = B型と名付けよう。東南ア  
ジアの代表的な言語であるカンボジア語、タイ語、インドネシア語などの  
キョウダイ名がこのタイプである。たとえば、インドネシア語:

*kakak* 「年上キョウダイ」~ *adik* 「年下キョウダイ」

このB型キョウダイ名は、手許のデータで165例を数える。それが最

<sup>6</sup>フィリピン諸言語のキョウダイ名を含めた親族名称に関しては、Elkins & Hendrickson  
(1984)に最も詳細なデータが集められている。

も集中して現れるのは、台湾(高砂諸語)、フィリピン、そしてインドネシア西部からインドシナ半島に及ぶ東南アジア言語圏(58例)であり、次いでアフリカのバントゥー語を中心にその周辺諸言語(24例)がこれに加わる。また個別の言語群としては、チベット・ビルマ語族の中のカレン諸語とインド洋のアンダマン諸語の多くがこのタイプに属している<sup>7</sup>。

このタイプのキョウダイ名は、とくに大陸部の東南アジア諸語では、たとえばタイ語で **phii chaay**「年上・男=兄」、**phii saaw**「年上・女=姉」のように、必要に応じてというよりもむしろ頻繁に、男女の性別標識が付加されて、実質的には次に挙げる年齢・性別4項型に近づいている。

### 2.3 年齢・性別型

本人から見た年齢差と相手の性別という2つの識別特性によって構成されるキョウダイ名は、理論的には次の5種類のタイプが可能である。すなわち、

- (イ) 年齢差を主成分として年上側だけに性別を設けるタイプ  
【兄～姉/年下キョウダイ】
- (ロ) 同じく年下側だけに性別を設けるタイプ  
【年上キョウダイ/弟～妹】
- (ハ) 性別を主成分として男性側だけに年齢差を区別するタイプ  
【兄～弟/女キョウダイ】
- (ニ) 同じく女性側だけに年齢差を区別するタイプ  
【姉～妹/男キョウダイ】
- (ホ) 年齢差と性別が均等に組み合わせられたタイプ  
【兄～姉/弟～妹】

この中で実際に検証されるのは、すでに日本語の八丈島方言で見た(イ)のタイプと現代日本語の本土方言に見られる(ホ)のタイプだけで、残りの3つは、後に触れるように、これまでにそのような報告例がないわけではないけれども、誰の目にも疑いのない確実な例はほとんど存在しない。これらが人類言語のキョウダイ名としてなぜ存在しないかという問題は後で取り上げることにして、まず実在のタイプから見ていこう。

<sup>7</sup>アンダマン諸語の親族名称については、Radcliff-Brown(1922)が残されたほとんど唯一の資料である。

### 2.3.1 年齢・性別3項型 (= C型)

これはすでに見た八丈島のタイプで、これを年齢・性別3項型 = C型と名付けよう。たとえば蒙古語のキョウダイ名がその典型である(形は文語形)。

aqa「兄」～ egeci「姉」

degü「年下キョウダイ」

このタイプは手許のデータで171例を数え、B型を若干上回る。C型は次に述べる年齢・性別4項型ときわめて近親なタイプで、同じ語族の中で両者がしばしば共存・併存し、互いに連続した分布を見せることが多い。またこの体系は、年下キョウダイに男女の識別標識を付加することによって、弟～妹の区別をすることも容易である。

ユーラシアでは、アルタイ諸言語の中のモンゴル語とツングース語がこのタイプの代表格で<sup>8</sup>、ほかにはウラル語の中のサモイェード語、東シベリヤのユカギール語、南に下がってチベット・ビルマ系の多くの言語、そしてオーストロアジア、オーストロネシア諸語の一部がこのタイプに属する。ユーラシア以外でこのタイプが最も多く見られるのはオーストラリアの原住民諸語であり、C型のデータの中で最多数(51)を占める。

年下キョウダイに性別を欠くこの3項型のキョウダイ名は、これとは別のたとえばB型を基本とするキョウダイ名の中で、とくに幼児の呼称体系として共存することがある。たとえば、フィリピンの諸言語の多くは通常の指示体系としてはB型かA型であるが、これとは別にもっぱら呼びかけ語として日本語のニーチャン～ネーチャンにあたるような名称をもっている。たとえば、タガログ語その他多くの言語に見られる *manong*「兄」～*manang*「姉」がそれである<sup>9</sup>。また琉球の諸方言でもすでに見た性差に基づく成人の指示体系と並んで、おそらく幼児語に由来するたとえば *ad<sub>3</sub>a*「兄」～*amma*「姉」(八重山方言)のような呼称が併存している(宮良1995:234)。

一般に、親族名称の中でこのような幼児の呼称体系は、本人から見た

<sup>8</sup>ただし、ツングース語の中の満州語(またおそらく女真語)は弟と妹を区別するが、その弟 = *deo* は蒙古語からの借用らしい(風間私信)。

<sup>9</sup>これはスペイン語の *hermano* ~ *hermana* に由来する(土田私信)。

年長者側に適用されるだけで、年少者側の名称を欠如するのが常であり、その意味で非対称的である。C型のキョウダイ名が一見不整合に見えながら、他の3項型と違って世界諸言語の中で数多くしかも安定した分布を示すのは、このタイプが幼児の呼称体系にその基盤をもっているからと考えられる。たとえば、すでに見た八丈島のキョウダイ名で、アシー～インネ/キョーデアという名称の中のキョーデアは、明らかに本来総称的な中立名称である。これは、もともとこの体系が年少者側名称を欠如する幼児語を基盤とし、その欠けた部分を呼称としてはけって用いられない中立的総称名で補うという形で成立したことを示している。同様に、現代朝鮮語のキョウダイ名で年少者側を表す *donsaeng* も、漢語の「同生」に由来し、意味は古い日本語の「ハラカラ」「同胞」と同じ中立的総称にほかならなかった。

このような3項型のキョウダイ名は、形としては、親子関係を表す父～母/子という3項型名称と全く同じであり、これも父と母に対する呼びかけ語だけをもつ幼児の呼称体系にその根源をもっている。下の世代で性別を欠くこの体系は、父～母/息～娘という対称的な4項型名称と並んで世界言語に数多くの例が見られる。しかし、これとは逆に上の世代で性別を欠き下の世代にそれを区別する親/息～娘という形の親族名称は全く知られていない。

このように、キョウダイ名に限らず一般に親族名称において性別の関与が常に年長者側を優先することは、すでによく知られている。爺～婆に対して孫の場合に性別が欠けるのは、世界言語の親族名称ではむしろ常態である<sup>10</sup>。これは、性の区別が顕在化しその役割を演ずるのには、生物学的にも社会的にも一定の成熟期間を要するという人間に課せられた必然的な制約に起因することはもちろんであるが、それと同時に、親族名称における幼児語の役割、あるいはむしろ幼児の観点というものの重要性を示唆している。親族のとくに呼称体系において、親族名の振り当てが一般に当該親族の最年少者の視点によって構成される(たとえば日本語で、夫婦間の

<sup>10</sup>たとえばベトナム語は、主要な直系親族の名称が首尾一貫して年少者側で性の区別を欠く3項型のシステムとなっている。すなわち、

同世代間: *anh*「兄」～ *chị*「姉」～ *em*「年下キョウダイ」

1世代間: *cha*「父」～ *mẹ*「母」～ *con*「子」

2世代間: *ông*「爺」～ *bà*「婆」～ *cháu*「孫」

呼称が子供ができるとパパ～ママとなり、孫ができるとジイちゃん～パーちゃんと変わる)というのは、別に日本語だけでなく、世界の言語に広く見られる現象である。

最後に、年齢・性別の組合せによるキョウダイ名の中で、C型と逆に年上側で性別を欠く(口)のタイプのキョウダイ名が世界言語の中に全くあるいはほとんど例証されないのは<sup>11</sup>、このような性別に関する年長側優位の原則、あるいは親族名称における幼児の視点というものによって完全に説明できよう。

### 2.3.2 年齢・性別4項型 (= D型)

これはいうまでもなく現代日本語に代表されるキョウダイ名である。これを年齢・性別4項型 = D型と名付けよう。ここには南インドのドラヴィダ語族タミル語の例を挙げる (Asher 1982:244)。ちなみに、この4項型キョウダイ名はドラヴィダ祖語にまで遡る可能性が高い<sup>12</sup>。

aqqaan「兄」～ akkaa「姉」～ tampi「弟」～ taŋke「妹」

このキョウダイ名は、手許のデータでは242例を数え、次の性別2項型と並んで世界諸言語の中で最も優勢なタイプであり、体系的にもまた分布の面でもきわめて安定している。その中心的な分布域は、ユーラシアではまずヴォルガ流域からウラル山脈に及ぶ中心部のウラル諸語、一部西南部の言語を除く大部分のチュルク諸語(シベリヤ北東部のヤクート語や古チュルク語も含む)ほとんどすべてのドラヴィダ諸語、多くのチベット・ビルマ諸語、そしてすべての中国諸方言である。ユーラシア以外では、

<sup>11</sup> Kinkade (1992) によれば一部のセイリッシュ語にやや異常なタイプとしてこれが現れるとされ、また Kroeber (1917) や Gifford (1922) で記録されたカリフォルニア諸語のキョウダイ名の中にも2、3の報告例が見られる。たとえば、モハヴェ語のキョウダイ名は次のように示されている (Kroeber 1917:341)。

inchien-k「兄・姉」～ isuich-k「弟」～ inya-k「妹」

しかし、これはおそらく

inchien-k「同性・年上」～ isuich-k「同性・年下」

inya-k「男性から見た女キョウダイ」

のようなシステムが男性話者に偏った形で記録されたかあるいは残存した結果であろう。ユマ諸語の本来のキョウダイ名は後に見るようなG4型(たとえばヤヴァパイ語)だったと見られるからである。

<sup>12</sup> ドラヴィダ諸語のキョウダイ名のデータとその言語間の対応については、Burrow & Emeneau (1984) が詳しい。

オーストラリア原住民語でC型以外のほとんどすべての言語がこれに属し、北米では大部分のアサバスカ諸語、ほとんどすべてのイロコイ諸語、大部分のユート・アステカ諸語、カリフォルニアのペヌート系およびホカ系の多くの言語がこのタイプである。

D型は前述のようにC型ときわめて親近であり、多くの言語でC型から体系的に均整なD型への推移が見られ、また両者が共存してその区別が分明でないケースも少なくない。

ちなみに、文字文化を通して日本語にも早くから導入された中国語の兄弟姉妹という4項型キョウダイ名は、中国では記録時代の相当古い時代からすでに確立されていたようで、中国最古の辞書とされる『爾雅』(前2世紀頃)にすでに次のような記述が見られる。

「男子先生為兄、後生為弟。女子先生為姉、後生為妹」(『爾雅』釈親)

#### 2.4 性別2項型(=E型)

すでに述べたように、これはヨーロッパの諸言語で最も優勢なキョウダイ名で、これを性別2項型=E型と名付けよう。このタイプは、手許のデータで283例を数え、単独のタイプとしては最多数を占める。ただし、検証例の半数近くが印欧語に属している。

このキョウダイ名は、地域的にも語族的にもきわめて明瞭に区画された分布域をもっている。すなわち、語族としてはインド・ヨーロッパおよびアフロ・アジアという2大語族と密接に結びつき、地域的には北部アフリカとヨーロッパのほぼ全域を覆い、そこから西南アジアを経てインド亜大陸へと分布圏を拡げている。これに属する言語は、この2大語族のほかに、アフリカではナイル・サハラ諸語、ユーラシアではほとんどすべてのコーカサス諸語、ケット語に代表されるイエニセイ諸語、そしてシュメル語その他系統不明の古代オリエント諸語である。

これ以外の語族でも、このタイプのキョウダイ名はしばしば散見される。しかしその多くは、これらの言語との接触によって二次的にこのタイプへ推移したものと見られる。たとえばウラル諸語は、もともとC型ないしD型に属すると見られるが、バルト海域とその周辺のフィン系諸言語は、ラップ(またはサーミ)語も含めて、すべてE型のキョウダイ名を呈示し、しかもその名称の一部は、たとえばフィンランド語の *sisar/sisko*

「女キョウダイ」に見るように、印欧語からの借用である<sup>13</sup>。

同様の推移は、チュルク語圏の西南部に位置する一部の言語でも起こっている。ここでは明らかにアラビア・ペルシア文化圏との接触がその引き金となった。手許のデータでは、トゥルクメン語、アゼルバイジャン語 (Öztopçu et al. 1996)、イランで話されているトルコ語アゼリ方言 (Haneda & Ganjelu 1979) などがすでにこの型に推移し、トルコ共和国のトルコ語も様々な変種を内蔵しながらどうやらこの方向への変化途上にある<sup>14</sup>。同様の変化は、インド・アーリア語圏に接する一部のチベット・ビルマ諸語、同じくインド・イラン語圏内に組み込まれた孤立的なドラヴィダ諸語 (たとえばブラフイ語) にも見られる。しかし近世以降ヨーロッパ人の世界進出に伴い、その圧倒的な植民地支配下に組み込まれたアフリカ、オセアニア、中南米の諸言語では、キョウダイ名の同じような推移と再編成がもっとドラスティックな形ですでに起こり、また現に起こりつつある。先に見た A 型キョウダイ名の出現も、このような言語接触による急激なキョウダイ名変化の一局面と見ることができよう。

E 型キョウダイ名は、このように特定の語族・地域との結びつきが強いだけでなく、それぞれの言語圏内部での変異がきわめて少ない。たとえば、印欧諸言語は、インド・アーリア語圏の周辺部で起こったごくわずかの事例を除けば、数千年にわたるこの語族の歴史の中で、キョウダイ名のタイプを基本的にほとんど変えなかった。また名称そのものの言語間の対応も驚くほど安定している (たとえば英語 brother : ペルシア語 buradar)<sup>15</sup>。

<sup>13</sup>一方ハンガリー語では、bátya「兄」nene「姉」öcs「弟または年下キョウダイ」と並んで、fivér「男キョウダイ」~ nővér「女キョウダイまたは妹」が共存している。ちなみに、fi-は「男」、nő-は「女」、vérは血縁(者)の意味。なお、全般的にウラル諸語間でのキョウダイ名の対応は変動が大きく、祖語のシステムの復元は難しい。

<sup>14</sup>トルコ語のキョウダイ名変化の中で中心的役割を演じているのは、本来中立的・総称名と見られる kardeş「同胞・仲間」で、これはキョウダイ名のあるシステムでは「年下キョウダイ」を、別のシステムでは kızkardeş「女キョウダイ」と対置されて「男キョウダイ」の意味を担う。またアナトリア南部ではペルシア語からの借用語 biradar「男キョウダイ」~ hemşire「女キョウダイ」の導入によって完全な E 型に移行した方言も見られる。

<sup>15</sup>主要な印欧諸語におけるキョウダイ名の対応については Buck (1949)、インド・アーリア諸語については Turner (1966) が最も詳しい。また内部における変異とその解釈については風間 (1984:139ff.) を参照。なお、手許のデータでは印欧語からの例が圧倒的に多く、結果として E 型キョウダイ名のデータ数を増加させることになったが、これは印欧語内部におけるキョウダイ名の変動を正確に知るためにとくに現代インド・アーリア諸語のキョウダイ名をかなり詳しくチェックしたためである。ちなみに、これまで公表されたキョウダイ名のデータでは、たとえば Murdock (1968) に見られるように、D 型の出現

一方、アフロ・アジア語族の場合も、E型と違ったキョウダイ名が現れるのは、サハラ以南に分布するチャド諸語(とベルベル語の一部)だけである。これらの言語は、周知のように、土着のニジェール・コンゴ諸語との長期にわたる接触・混合によって他のアフロ・アジア諸語とは典型的にも大きく異なっている。一方、チャド諸語を除くいわゆる「セム・ハム諸語」は、数千年前の古代エジプト語やアッカド語以来、性別2項型のキョウダイ名を全く変えていない。これらの言語圏におけるキョウダイ名のこの強靱な一様性は、一体何に起因するのか。

キョウダイ名の中で性別という特性は、すでに見たように年齢差や性差と結びついて現れるのがむしろ普通であり、それがキョウダイ名の唯一の構成原理とされるのは、印欧語とセム・ハム語を除く世界言語の全体から見るとむしろ異例といつてよい。上述の言語圏以外で、これと同じE型キョウダイ名を本来的にもっていたと見られるのは、どうやら、現在アフリカ南部に辛うじて生き残るコイサン語族の中のナマ・ホッテントットなどに代表される中央群の言語だけである。この中央群のコイサン諸語とハム・セム諸語、印欧語(そしてまたコーカサス諸語やイエニセイ諸語)には、一体どのような共通点があるだろうか。

直裁に言えば、それは文法的性(grammatical gender)である。すなわち、これらの言語はおしなべて、名詞の文法カテゴリーとして男性・女性の区別をもち、それを名詞類別の唯一のあるいは少なくとも主要な原理としている。このような言語ではあらゆる名詞(あるいは少なくとも人間名詞)は、必ず男性名詞か女性名詞に振り分けられる。もちろんキョウダイ名も例外ではない。単に年上キョウダイとか同性キョウダイというような相手の性別に中立的なキョウダイ名は、これらの言語ではそもそも存在し得ないのである。キョウダイのような中立的総称名でさえ、集合名詞という特別の形式をとらないかぎり使用できない。たとえばスペイン語のキョウダイ名の *hermano* ~ *hermana* は、基幹語彙は1個しかなく、普通ならば中立1項型と認定してもおかしくない。しかしこれが「男キョウダイ」「女キョウダイ」という2項型のキョウダイ名として現れるのは、この言語ではあらゆる名詞=形容詞が男性形と女性形のどちらかを選択しなければな

率がE型を上回って最も高くなっている。

らないからである。セム語の *ah* ~ *ah-ti*、古典ギリシア語の *adelphos* ~ *adelphē* など同様である。要するに、これらの言語で性別は文法によって有無をいわず強制されている。

現在の世界諸言語におけるキョウダイ名の分布を見ると、E型に属する言語のすべてが *gender* のカテゴリーをもつわけではない。しかし逆に、文法カテゴリーとして *gender* をもつ言語はほとんどすべてE型キョウダイ名をもっている<sup>16</sup>。ここから、次のような普遍性を導くことは十分に可能であろう。

「もしある言語が男性～女性を主軸とする *gender* をもつならば、そのキョウダイ名はほとんど必ずE型である。」

E型言語圏がそのキョウダイ名に関して内部的変異がきわめて少なく著しい安定性を示しているように見えるのは、問題のキョウダイ名がまさに言語の文法によって制約され、それ以外のタイプの選択をほとんど不可能にしているからである。*gender* をもつ言語でほかに選択可能なタイプは、これまでに挙げた中では年齢差と性別が均整に配分されたD型が唯一の候補である。そして一部のインド・アリア諸語とチャド諸語には確かにそのようなキョウダイ名が現出している。しかし、これは言語接触が生み出したむしろ例外的なケースであって、どうやら *gender* をもつ言語にとって、D型キョウダイ名(あるいはむしろ年齢差の関与)は本来異質なもののように見える<sup>17</sup>。

たとえばインド・アリア語圏の周辺部、すなわち南インドのシンハラ語、東インドのベンガル語、ヒマラヤ地域のネパール語やバハリー語などでキョウダイ名がE型からD型へと推移したが、それと平行してこれらの

<sup>16</sup> 男女性を含めた名詞類別のタイプと世界言語におけるその分布の概要については、拙論(2000:100ff.)を参照。

<sup>17</sup> ヨーロッパの印欧語の中で年上の兄・姉に相当するキョウダイ名をもっているのは、バルカン半島のブルガリア語とマケドニア語だけで、これはMorgan(1871:85)にもすでに記録されている。しかし、たとえばブルガリア語の *batko*「兄」*kaka*「姉」は呼称として用いられるだけで、指示名称にはなっていない(Comrie & Corbett 1993:244, 299)。その音形から見て幼児語に由来するようであるが、ブルガリア語が元来タートル系の民族が言語的にスラヴ化することによって形成された点から見てこのキョウダイ名は興味深い。

一方、インド・アリア諸語の周辺部でD型に推移した言語の場合、新たに導入されたのは年上の「兄」「姉」で、固有のキョウダイ名は年下の「弟」「妹」に意味を変えている(たとえばネパール語で、*daai*「兄」*dii*「姉」に対して、*bhaai*「弟<男キョウダイ」*ba(h)ini*「妹<女キョウダイ」)。これも新しい体系が幼児の呼称体系に由来することを示している。

言語ではまた、アリア語本来の gender の原理が衰退するかあるいは完全に消滅している。E型言語圏におけるD型キョウダイ名の出現と gender の衰退・消滅との関連は、おそらくチャド諸語やナイル・サハラ諸語でも認められるのではなからうか<sup>18</sup>。

## 2.5 性差が関与するキョウダイ名

性差が関与するキョウダイ名は、他の識別特性と組み合わせられると、そのタイプは、理論上も実際上も、相当に多種となる。まず構成の単純なものから見ていこう。

### 2.5.1 性差2項型(=F2型)

これはすでに見たB型、E型と同じように、性差だけを識別特性とする体系的には最も単純なシステムで、これを性差2項型=F2型と名付けよう。たとえば、メラネシアのギルバート諸島で話されるキリバティ語のキョウダイ名がこのような2項型である(Marshall (ed.) 1983:155)

tari「同性キョウダイ」～ m'āne「異性キョウダイ」

このキョウダイ名に関して注目すべき点は、同じ名称が男性話者と女性話者の間で正反対の指示対象を表し、男女間でいわば鏡像的な分布をなす点である。たとえば上の例で、m'āneは男性話者が使えば「女キョウダイ」、女性話者が使えば「男キョウダイ」ということになる。

このタイプは手許のデータで59例、その数は決して多くない。その分布もきわめて限られ、オセアニアで一部のパプア諸語とオーストロネシア諸語に48例を数えるほかは、アフリカに2、北米に2、南米に3例と

<sup>18</sup>ただし、南米アマゾン地域で gender またはそれに類する文法カテゴリーをもつと見られる言語の中には、基本的に年上～年下という2項型のキョウダイ名が gender の区別によってD型のキョウダイ名を作り出している言語がある。たとえば、ブラジル北西部アマゾナス州で話されるトゥカノ語のキョウダイ名は次のようである(Merrifield 1985:57)。ここで -o は女性形を表す接尾辞。

nami「兄」～ nami-o「姉」～ acabiji「弟」～ acabij-o「妹」

これに類するD型のキョウダイ名は、手許のデータではかにクベオ語、コレグアヘ語(トゥカノ系)やグアヒボ語に見られる。南米アマゾン諸語における gender の現象と親族・キョウダイ名称との関連については今後さらに詳しい調査が必要である。

なお、ユーラシアではドラヴィダ語が人間名詞に男性～女性を区別する言語であり、従って gender をもつ言語にD型キョウダイ名が現れる稀なケースと見なすこともできよう。

いうようにきわめて散発的である。

ちなみに、オセアニアではニューギニアのトークピシン、バヌアツのピスラマ、ソロモン諸島のメラネシアピジンなど英語をベースとするピジン・クレオールで、もとの英語のキョウダイ名が F2 型へと再編成されているのが注目される。たとえばトークピシン (Wurm & Mühlhäusler 1985:425) およびソロモン諸島のピジン英語 (Mihalic 1971) のキョウダイ名は次のようである (カッコ内はヴァヌアツで話されるピスラマ語の形 (Guy 1976))。

**brata (prata)** 「同性のキョウダイ」 ~ **susa (sista)** 「異性のキョウダイ」

### 2.5.2 性差・性別3項型 (= F3a 型、F3b 型)

次に、性差と性別が関与する3項型のキョウダイ名は、年齢・性別3項型と同じように、理論上、同性側に男女を区別するタイプと異性側にそれを区別するタイプの2つが可能であり、またどちらのタイプも少数ではあるが確実に例証される。前者を F3a 型、後者を F3b 型と呼ぶことにする。

手許のデータでは、F3a 型は 57 例、F3b 型は 19 例を数え、とくに後者は単独のタイプとしては最少数派に属する。F3a 型は2つの中心分布域を有し、そのひとつはニューギニア北部のパプア諸語、もうひとつは中米最大の語族であるオトマンゲ諸語である。たとえば、メキシコ南部オアハカで話されるサポテック語 (Amatlan 方言) のキョウダイ名は次のようである (Merrifield 1981:290)。

**weč** 「同性の男キョウダイ」 ~ **bal** 「同性の女キョウダイ」

**bzan** 「異性のキョウダイ」

これはオトマンゲ諸語のキョウダイ名の中で最も優勢なタイプである。

次に F3b 型は、オセアニアに 11 例が現れるのを除けば、ほかではごく散発的である。ただこの中で注目されるのは、パキスタン北部のカラコルム山系の中に孤立するブルシャスキー語にこのタイプが見られることである。参考までにそのキョウダイ名を次に示そう (Berger 1998)。

**-ulus** 「女性から見た男キョウダイ」 ~ **-yas** 「男性から見た女キョウダイ」

**-ço** /同性のキョウダイ

### 2.5.3 性差・性別4項型 (= F4型)

これは同性側と異性側の双方に男女が区別され、D型と同じく形としては均整なタイプである。これを性差・性別4項型 = F4型と名付ける。

このタイプは手許のデータで24例を数え、アフリカから南米まですべての地域に散在する。しかしとくに集中的な分布域はない。その中でやはり注目されるのは、ヨーロッパで性差が関与するキョウダイ名をもつ唯一の言語としてのバスク語である。すなわち、この言語(ピズカイヤ方言)のキョウダイ名は次のようである(Saltarelli et al. 1988:291)

**anaia**「男性から見た男キョウダイ」~ **arreba**「男性から見た女キョウダイ」  
**neba**「女性から見た男キョウダイ」~ **ahizpa**「女性から見た女キョウダイ」

このキョウダイ名で注目されるのは、男性話者と女性話者の間でキョウダイの名称が完全に分離していることで、それぞれの話者のキョウダイ名を単独に見れば、いずれもE型のキョウダイ名を使用していることになる。これは、性差に基づくキョウダイ名が話者の男女差に転換された典型的なケースである<sup>19</sup>。

### 2.5.4 性差と性別が関与するその他のタイプ

性差を主成分としそれに性別が関与するキョウダイ名のタイプは以上で尽くされるが、これとは別に、性別を主成分としそれに性差が加わるという形のキョウダイ名として、理論上、次の2つのタイプが可能である。

イ) 男キョウダイの側だけに性差が現れるタイプ、すなわち、

男性から見た男キョウダイ~女性から見た男キョウダイ/女キョウダイ

ロ) 女キョウダイの側だけに性差が現れるタイプ、すなわち

男キョウダイ/男性から見た女キョウダイ~女性から見た女キョウダイ

このようなタイプは、上に見たF4型のキョウダイ名のどちらか一方が融合するという形で生ずる可能性があり、実際に、ピズカイヤ方言以外のバスク語方言では上の例の **neba**「女性から見た男キョウダイ」が消失して、見たところ(ロ)のタイプが現れている(Trask 1997:269) すなわち、

**anaia**「(男・女性から見た)男キョウダイ」

<sup>19</sup>なお、北米太平洋岸のユローク語では、指示体系におけるF4型がC型の呼称体系と共存している(Gifford 1922:27, Kroeber 1934:16)。

arriba「男性から見た女キョウダイ」～ ahizpa「女性から見た女キョウダイ」

これは、バスク語のキョウダイ名が男性話者を中心にE型へ推移していく中で、女性話者の ahizpa が古い体系の残滓として取り残された状況と見ることもできよう。

性別を主成分とし性差がそれに組み込まれるという形のキョウダイ名の確かな例は、これ以外に手許のデータの中には全く見られない。このことから、キョウダイ名における性差と性別特性に関して次のような一般原則を導くことができるだろう。

「性差と性別が関与するキョウダイ名において性差は常に性別に優先する」

これはまた、性差から性別型へという形のキョウダイ名の変化は起こり得ても、その逆の形の変化は起こり得ないことを意味している。性別2項=E型が動きのとれないキョウダイ名だということはここからも窺い知られよう。

## 2.6 性差と年齢差の関与するキョウダイ名

性差と年齢差が関与するキョウダイ名のタイプとしては、年齢差と性別の場合と同じように、理論上、

- イ) 同性側に年上・年下を区別するタイプ
- ロ) 異性側に年上・年下を区別するタイプ
- ハ) 同性・異性の双方に年上・年下を区別するタイプ
- ニ) 年上に同性・異性を区別するタイプ
- ホ) 年下に同性・異性を区別するタイプ

という5つのタイプが可能である。しかし、この中で主要なタイプとして例証されるのは(イ)だけである。(ロ)は全く例証がなく、(ハ)は形としては均整なタイプであり、これまでにその報告例が全くないではないが、少なくとも手許のデータで確実な例は見られない。(ニ)(ホ)に類したキョウダイ名は、後に見るように、必ず性別という第3の特性と結びつき、性差だけが関与するというケースは見られない。ここから、性差と年齢差に関して次のような一般原則を導くことができる。

「性差と年齢差の2つの特性が組み合わせられたキョウダイ名において、

年齢差は同性側にしか現れない」

ところで、先に (§2.3) 年齢・性別3項型のキョウダイ名に関して、理論上可能であるが実際には例証されないタイプとして、男キョウダイの側だけに年齢差が現れるタイプ (§2.3 [八])、女キョウダイの側だけに年齢差が現れるタイプ (§2.3 [二]) を挙げた。このこのようなタイプのキョウダイ名がなぜ現れないか、その理由は上述の原則によって完全に説明されるであろう。いずれのタイプも男性話者が女性話者のどちらかでこの原則に違反するキョウダイ名が現出するからである (すなわち、[八] は女性話者の側で、[二] は男性話者の側で年齢差が異性側に生じてしまう)

### 2.6.1 性差・年齢3項型 (= G3型)

このように、性差と年齢差が関与するキョウダイ名で実際に例証されるのは、上の(イ)のタイプに限られる。これを性差・年齢3項型 = G3型と名付けよう。

このタイプは、手許のデータで134例を数え、性差が関与するキョウダイ名の中で最も数が多い。その分布を見ると、2つの中心分布域を区別できる。ひとつはアフリカのバントゥー語圏、もうひとつはオーストロネシア語族の中のおセアニア語派である。とくにG3型は、アフリカのニジェール・コンゴ語族全体の中で最も優勢なタイプである。例として、ウガンダ南西部のバントゥー系ンゴレ・キガ (Nkore-Kiga) 語のキョウダイ名を挙げよう (Taylor 1985:224)

**mukuru** 「同性の年上キョウダイ」 ~ **murumuna** 「同性の年下キョウダイ」  
**munvaanya** 「異性のキョウダイ」

このタイプのキョウダイ名で留意すべきは、言語使用上に現れる男女差である。たとえば上のキョウダイ名を男性話者の側だけから眺めると、あたかも

**mukuru** 「兄」 ~ **murumuna** 「弟」 / **munvaanya** 「女キョウダイ」

のような形が現出し、これは先に挙げた一般原則に違反するタイプ (§2.3の[八]) となる。諸言語のキョウダイ名の報告例の中にはこのような例を時折見かけることがあり、こうしたデータに基づいてこれをキョウダイ

名のタイプのひとつに掲げる学者もないではない<sup>20</sup>。一般に性差が関与するキョウダイ名は、通常の観察者・調査者に見誤られる可能性が高く、このような言語の対訳辞書では、brother/sister でそのまま定義できる名称がないために、説明はしばしば驚くほどの混乱を呈することがある。

## 2.7 性差・年齢・性別が関与するキョウダイ名

性差が関与するキョウダイ名の中で最後に取り上げるのは、性差、年齢差、性別というキョウダイ名で問題となる3つの識別特性が全部組み合わせられたもので、構成としては最も複雑なタイプとなる。この3者の組み合わせによるキョウダイ名の可能な数は、数学的には4千を越えるとされるものであるが、実際に例証されるのはごく限られている<sup>21</sup>。それどころか、諸言語に例証されるそれらのキョウダイ名の中で、ある程度広い分布をもちタイプとしても安定していると思われるのは、実はただひとつしかない。それは、先に挙げたG3型の「異性のキョウダイ」の側に男女を区別するタイプで、すでに見た琉球語のキョウダイ名がこれにほかならない。これを性差・年齢・性別4項型 = G4型と名付けよう。

### 2.7.1 性差・年齢・性別4項型 = G4型

先に琉球語で見たG4型キョウダイ名の例として、ここではポリネシアのタヒチ語とアフリカのバントゥー系テンボ語の例を挙げておこう。タヒチ語の例はポリネシアで最も典型的なキョウダイ名である。また、テンボ語の2つの同性キョウダイ名は、先に見たンゴレ・キガ語のそれと同源で、多くのバントゥー諸語に共通する。ここに現れる kulu/kuru は通常の語としては「大きい、年長の」を意味する<sup>22</sup>。

<sup>20</sup>たとえば、黄(1992:76)に挙げられた Namuyi(納木依)語のキョウダイ名がこのような形とされ、また Grierson(1903-27)の Vol.1-Pt.2 のチベット・ビルマ諸語の比較語彙の中にも同じようなキョウダイ名がいくつか挙げられている。しかしこのような報告例は、多くの場合、G3型あるいは後に見るG4型のキョウダイ名が男性話者の側だけに偏って観察された結果生じたと思われる。確実な例証とはいえない。

<sup>21</sup>3つの意味特性の組合せによる可能なキョウダイ名の数の数学的な算定式とそれに関する議論については、Epling et al.(1973:1599f.)、劉(1978)を参照。

<sup>22</sup>ついでながら、梶茂樹氏の「テンボ語の親族名称」と題する興味深い論考がインターネット上で公開されている。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/%7EP aflang/TEXTS/mar97/kaji97.txt>

なお、Kaji(1992:41f.)に見られるリンガラ語の kana「女キョウダイ(soeur)」はおそら

【タヒチ語】(Tryon (ed.) 1995:164ff.):

tua<sup>2</sup>na 「同性の年上キョウダイ」 ~ teina 「同性の年下キョウダイ」

tu<sup>2</sup>aane 「女性から見た男キョウダイ」 ~ tuahine 「男性から見た女キョウダイ」

【テンボ語】(Kaji 1985):

mu-kulu 「同性・年上」 ~ mu-lumuna 「同性・年下」

mu-shisha 「女性から見た男キョウダイ」 ~ mu-ali 「男性から見た女キョウダイ」

このタイプは手許のデータで 118 例を数え、G3 型とほぼ匹敵する。その分布は、G3 型のそれとある程度重なり合い、また同じ言語の中に両タイプが共存しあるいは分別困難な場合も少なくない。その中心分布域は、やはりアフリカのバントゥー語圏とオセアニア(とくにポリネシア)を中心とするオーストロネシア諸語である。ちなみに、バントゥー語圏では G3 型が最も優勢であるのに対して、オーストロネシアでは G4 型がこの語族のキョウダイ名を代表する最も有力なタイプとなっている。

アフリカとオセアニア以外でこのタイプが現れるのは、数は少ないけれども、ユーラシアではその太平洋沿岸部にほぼ集中している。すなわち、ニコバル語を含む一部のオーストロアジア諸語、一部のミャオ・ヤオ諸語、琉球語、チュクチ・カムチャツカ諸語、一部のエスキモー・アリュート諸語である。これに接して北米大陸では、北西海岸諸語の一部、カリフォルニアの一部の言語、そして北米南東部の「湾岸諸語」である。さらにこのタイプは、散発的ではあるが中米と南米の諸言語にもその分布を拡げている。

3つの識別特性が組み合わされたキョウダイ名の中で性差を主成分とするキョウダイ名は、4項型として例証されるのはこのタイプだけある。これは3つの成分からなるキョウダイ名としては最小の構成であり、しかも上述の性差と年齢差に関する一般的制約から導かれる唯一のタイプといってよいだろう。これ以外に例証されるキョウダイ名は、一部の変則的なタイプを除き、すべて項の数が5以上となる。その種類はかなり多岐にわたるが、いずれも例が少なく、分布も散発的である。このようなタイプがいかにして発生したかという問題は後に譲って、まず例証されるタイプにつ

く「異性のキョウダイ」で、ンゴレ・キガ語と同じ G3 型のキョウダイ名と見るのが正しい解釈であろう。

いてひとつあたり眺めてみよう。

## 2.8 多項型キョウダイ名(Gm型)

基本的な名称が4を越えるキョウダイ名は、ここでは一括して多項型 = Gm型と呼ぶことにする。この中には多種多様なキョウダイ名が現れるが、大別すると、違った2つのタイプが抱き合わされた複合的なタイプ、もうひとつは単一の型の中に多数の項が組み込まれた文字通りの多項型が区別できる。前者をかりに複合多項型 = Gm-a型、後者を組込多項型 = Gm-b型と名付けよう。

### 2.8.1 複合多項型 = Gm-a型

この型のキョウダイ名の中で比較的例の多いのは、C型と性差型(F~G型)の抱き合わせで、これにもいくつか変種がある。

#### 【ギリヤーク型】

本稿のはじめに挙げたギリヤーク語のキョウダイ名は、この複合型の代表的なもので、ここでは、すでに述べたように、G4型の異性側(男性から見た女キョウダイ~女性から見た男キョウダイ)がC型と合体した形になっている。このタイプのキョウダイ名は、ほかにチベット・ビルマ諸語の中のチャムリン語、カチン語、ハニ語(緑春・墨江方言)、チベット語西部方言のラダキー語、アラスカ半島のスフピアック・エスキモー語(Sugtestun)などに見られる。ここにはカチン語の例を挙げておこう(藪私信)。

kāhpu「兄」~ kāna「姉」~ kānau「年下キョウダイ」

kājan「男性から見た女キョウダイ」~ kāyun「女性から見た男キョウダイ」

#### 【アルゴンキン型】

一方、北米アルゴンキン諸語に現れるキョウダイ名はこれと幾分異なり、C型と合体しているのはF型の変種である。その最も複雑なのはC + F4型(Delaware, Sauk)、最も単純なのはC + 異性キョウダイ(Illinois-Miami)

であり<sup>23</sup>、その中間にいろいろな変種が現れる。Hockett (1964) によれば、「中央アルゴンキン祖語」にはC型キョウダイ名と並んで、少なくとも「異性キョウダイ」と「同性キョウダイ」を表す名称が再建できるとされる。以下にオジブワ語の例を挙げよう(永瀬 1997)。

**nisaye**「兄」～ **nimise**「姉」～ **nishime**「年下キョウダイ」  
**nishikwe**「同性のキョウダイ」～ **nindawema**「異性のキョウダイ」

#### 【ナバホ型】

複合型のもうひとつは、一方のC型がD型へと移行したつまりD+F型と見られるもので、D型分布圏の周辺部に少数の例が散見される。たとえば、チベット・ビルマ語圏ではグルン語(ネパール)、アンガミ語(ナガラランド)、北米諸言語では、サルシー語、ナバホ語(アサバスカ)、シュスワップ語、リリエット語(内陸セイリッシュ)、南パイユート語、西および南東モノ語、セラノ語(ユート・アステカ)、アツゲウイ語(ホカ)、南米ではグアラニ語などが挙げられる。ここでD型と合体しているのは、多くの場合、G4型の異性側(男性から見た女キョウダイ～女性から見た男キョウダイ)である。以下はグルング語のキョウダイ名である(Glover & Glover 1977:303ff.)。

**aadaa**「兄」～ **aanaa**「姉」～ **ali**「弟」～ **angaa'**「妹」  
**ri'maē**「男性から見た女キョウダイ」～ **muyūma'ē**「女性から見た男キョウダイ」

#### 2.8.2 組込多項型 = Gm-b 型

ここには最も多様な変種が現れるが、以下、項の多いタイプから順次挙げよう。

#### 【セリ・ダコタ型】

組込多項型の中で最も複雑な構成は、同性側に4種、異性側に4種(あるいは男性話者に4種、女性話者に4種)合計8種の名称からなるキョウダイ名である。このようなキョウダイ名は、理論上ただひとつしか存在しない。このタイプのキョウダイ名は、Morgan (1871) によって記述された

<sup>23</sup>cf. Costa (1999).

スー族のオガララ語 Ogalalla (すでに消滅したダコタ語の1方言)の例がこれまで知られていたが、現在話されている言語でこれの確実な例と見られるのは、手許のデータではセリ語(メキシコ北西部ホカ系)だけである。参考までにそのキョウダイ名を以下に挙げよう。左が男性話者の側、右が女性話者の側から見た名称である(Moser & Marlett 1997):

anyáac 「年上・男性=兄」	amáac 「年上・男性=兄」
azcz 「年下・男性=弟」	acaz 「年下・男性=弟」
apáac 「年上・女性=姉」	azáac 「年上・女性=姉」
acóome 「年下・女性=妹」	atcz 「年下・女性=妹」
【男性話者】	【女性話者】

8種の名称はいろいろな形で配列できるけれども、これは結局のところ、D型キョウダイ名が男性話者と女性話者の間で完全に分離した体系と見ることができよう<sup>24</sup>。

形としてはこの上もなく均整なこの8項型にきわめて近いタイプがダコタ語をはじめとするスー諸語に現れる。これはセリ語の「年下・男性」(=「弟」)の部分にだけ男性話者~女性話者の区別がなく、そのため項の数は7となり、ここに不均衡が生じている。スー諸語でこのタイプは、ダコタ=ラコタ、アシニポイン、オマハ・ボンカ、カンサ、アイオワ・オト、ピロクシなど多くの言語に見られ、この語族に特徴的なキョウダイ名としてMorgan 以来よく知られている。ここにはテトン・ラコタ語の例を挙げよう(Boas & Deloria 1941:129)

c'iyé 「男性から見た兄」 ~ tiblo 「女性から見た兄」  
 t'ake 「男性から見た姉」 ~ c'uwe 「女性から見た姉」  
 taksi 「男性から見た妹」 ~ mit'q' 「女性から見た妹」  
 misu 「男・女性から見た弟」

一方、サピアによって記録されたヤナ語(すでに消滅したカリフォルニ

<sup>24</sup>セリ語の親族名称はインターネット上でも公開されている:

<http://www.und.nodak.edu/dept/linguistics/wp/1997Moser-Marlett.pdf>

この言語では、話者の男女差がキョウダイ名だけでなく親族名称の隅々まで行き渡っている点が注目される。

なおほかに手許のデータでは、20世紀半ば頃に消滅したメキシコ北東部のコアウイルテコ語のキョウダイ名も、Swanton (1940)の残した資料によればセリ語と同じ8項型である。

アのホカ系言語)は、ダコタ語と違って「妹」の部分に男性話者～女性話者の区別を欠く次のような7項型となっている(Sapir 1918:154f.)

**umāyā-na**「男性から見た兄」～ **īsī'yau-na**「女性から見た兄」  
**marī'miyau-na**「男性から見た姉」～ **umāmari'mi**「女性から見た姉」  
**wayēmai'mā**「男性から見た弟」～ **k<sup>ʔ</sup>atc'u**「女性から見た弟」  
**k<sup>ʔ</sup>atdai-na**「男・女性から見た妹」<sup>25</sup>

#### 【ノス・カヤビ型】

セリ語ほど複雑ではないが、外見的にはかなり均整な形をした6項型のキョウダイ名がある。そのひとつは、G4型の同性側に性別が加わってここに4つの名称が区別されるタイプである。チベット・ビルマ諸語の中のノス(喜徳)語(口語派)やブラジルのマト・グロツソで話されるカヤビ語(トゥピ・グアラニ)(Merrifield 1985)にその例が見られる。参考までにノス語のキョウダイ名を以下に挙げよう(黄 1992:76)

**vjvu**「男性から見た同性・年上=兄」～ **izi**「男性から見た同性・年下=弟」  
**vjmo**「女性から見た同性・年上=姉」～ **nima**「女性から見た同性・年下=妹」  
**nimo**「男性から見た女キョウダイ」～ **matsɿ**「女性から見た男キョウダイ」

#### 【グリーンランド型】

これとやや違った6項型のキョウダイ名は、G4型の異性側に年齢差が加わってここに4種の名称が区別されるタイプである。グリーンランドのエスキモー語やカナダ東部(バフィンランド、コッパー・エスキモー)のエスキモー方言のキョウダイ名がこのタイプに属する。下に挙げるのはグリーンランド・エスキモー語のキョウダイ名である(Fortescue 1984:357f.)

**angaju(q)**「同性・年上」～ **nuka(q)**「同性・年下」  
**aliqa(q)**「男性から見た姉」～ **naja(k)**「男性から見た妹」  
**ani**「女性から見た兄」～ **aqqalu(aq)**「女性から見た弟」

このキョウダイ名も、男性話者、女性話者の側から見るとそれぞれD型

<sup>25</sup>ただしその南部方言に当たるヤヒ語(同じく消滅)のキョウダイ名は次に挙げるノス・カヤビ型に属する(Sapir 1918:161f.)

キョウダイ名として現れる。ただしセリ語のように完全に分離しておらず、同性側の名称が男女間で重なり、そこに鏡像分布が現れている。

ちなみに、性差が関与するキョウダイ名で異性側にも一貫して年齢差が現れるのは、このタイプだけである。

以上に挙げた以外で多項型と見られるキョウダイ名は、基本的にはD型ないしC型と見られる体系の中に性差の特性が部分的に組み込まれたタイプである。つまり、性差はここでは主成分ではなく、従属的・副次的な役割しか演じていない。性差が組み込まれる方式には、年上側と年下側、男キョウダイ側と女キョウダイ側という違いがあり、そこに様々な変種が生ずる。たとえば、朝鮮語は年上側に、アイヌ語は年下の女キョウダイの部分に性差が組み込まれたキョウダイ名ということになる。以下にその主なタイプを挙げよう。

#### 【ビルマ型】

まず、年下側に性差が組み込まれてここに4種の名称が現れる見たところ均整な6項型のキョウダイ名は、たとえばビルマ語(低地方言)に見られる<sup>26</sup>。

**akou** 「年上・男キョウダイ=兄」 ~ **ama** 「年上・女キョウダイ=姉」

**nyi** 「男性から見た弟」 ~ **hnama** 「男性から見た妹」

**maun** 「女性から見た弟」 ~ **nyima** 「女性から見た妹」

ビルマ語と同じ6項型のキョウダイ名は、ほかにバタン(巴塘)語(中国四川省)(黄1992)、また北米のネズ・パース語、サハプティン語(台地ベヌート系)にも現れる(Aoki 1994)。このキョウダイ名も男性・女性それぞれの話者から見れば完全なD型である。

#### 【アイヌ・ユピック型】

アイヌ語のキョウダイ名はこのような性差ないし男女差が「妹」の部分に局限された5項型であるが、この例は比較的多い。手許のデータから

<sup>26</sup>Brant & Khaing (1951)、なお、藪(私信)によれば、現在のランゲーンの標準ビルマ語は、<sup>2</sup>akou「兄」~<sup>2</sup>ama「姉」~nyii「弟」~nyiiima「妹」という形のD型にmong「女性から見た弟」が付加される、つまりアイヌ語とは逆に「弟」の部分に性差が現れる形が現出している。

その言語名だけを挙げると、アツイ語(チベット・ビルマ)、ホー語(ムンダ)、中国雲南省のヤオ語(ミャオ・ヤオ)、海南島のオンペー語(タイ・カダイ)、北米ニューメキシコのズニ語、メキシコ北部のトラフマラ語(ユート・アステカ)、中米のパメ語(オトマンガ)などである。

このアイヌ語型と非常に親近でときに区別の困難なキョウダイ名として、基本的にC型であるが、それに「男性から見た妹」が付け加わるという形のキョウダイ名がある。たとえば、アラスカの中央ユピック・エスキモー語のキョウダイ名がそれである(Jacobson 1984:671f.)

anngaq 「兄」～ alqaq 「姉」～ uyuraq 「年下キョウダイ」

nayagaq 「男性から見た妹」

このキョウダイ名は、男性話者の側から見るとD型、女性話者の側から見るとC型となって、キョウダイ名が男女間で明らかに不均整な形となっている。これと同じかこれに近いと見られるキョウダイ名は、ほかにサントラル語、ビルホル語(ムンダ)、ホピ語(ユート・アステカ)、カガバ語(南米チブチャ)などに見られる。

#### 【ムン・ウディ型】

これに対して、年下男キョウダイの側に性差が現れ、男性から見た「弟」と女性から見た「弟」が区別される上述のラングーンのビルマ語のようなキョウダイ名は比較的稀であるが、手許のデータでは、ムン(門)語(ミャオ・ヤオ)、チベット・ビルマ語の中のウディ(武定)語、パラ(波拉)語(黄 1992)、ロタ語(ナガ・ランド)などに例が見られる。下はムン語(海南島のヤオ語方言)の例である(Shintani & Yang 1990:181)

koo 「兄」～ 'oo 「姉」～ tai 「妹」

zjou 「男性から見た弟」～ nao 「女性から見た弟」

#### 【オトミ型】

最後に、C型またはD型の年上側に性差が組み込まれた、たとえば梅田(1991)に示された朝鮮語のようなキョウダイ名はきわめて珍しい。手許のデータでこのようなキョウダイ名は、中米オトマンガ語族の中のオトミ語

とほかにはシベリヤのユピック・エスキモー語(セント・ローレンス島)に見られるだけである。参考までにオトミ語(メスキタル方言)のキョウダイ名を以下に挙げよう(Merrifield 1981:270)。

xwədq「男性から見た兄」～ idq「女性から見た兄」

nkhu「男性から見た姉」～ xuxwä「女性から見た姉」

kü「年下キョウダイ」

一方、セント・ローレンス島のエスキモー語では、「男性から見た姉」(nayaq)は場合によって「妹」を含み、同じく「女性から見た兄」(kuyəq)は「弟」を含むことも可能で、必ずしも年上だけに固定していない(Damas 1984:269)。後に見るように、朝鮮語のキョウダイ名も実際はこれに近いであろう。

\* \* \* \* \*

複合的・多項的なキョウダイ名は、仔細に吟味すればまだほかの変種を挙げることもできる。しかし以上に列挙したのものも含めて、これらのキョウダイ名はいずれも動揺的、不確定的な性格を帯び、内部的な変異も大きい。これらを安定した単独のタイプとしてでなく、一括して「複合・多項型」と名付けたゆえんである。このようなキョウダイ名がタイプとして不安定なことは、世界諸言語におけるその出現率の低さからもはっきり窺われる。すなわち、このようなキョウダイ名は、手許のデータの中で全部合わせても124例、全体の10%にも満たない。またその中の個別の変種について見ても、それだけで10例を超えるケースはほとんどない。

一方、これらのキョウダイ名の地理的な分布を見ると、これが現れるのはユーラシアではチベット・ビルマ語圏を含めて太平洋沿岸部の諸言語に限られる。そしてこれは、エスキモー・アリュート諸語を介してアメリカ大陸へとつながり、とりわけ北米は、複合・多項型キョウダイ名の世界で最も出現度の高い言語圏となっている。しかし、これらの地域に現れた多種多様なキョウダイ名は、それぞれの語族にとってけっして本来的な姿だったと考えることはできない。それは多くの場合、古いキョウダイ名が別の新しいタイプへと推移する過渡的な状況の中で現れたと見なければならぬのである。とくに、太平洋沿岸部の言語圏で、この変化はG4型か

ら C 型・D 型への推移という形で起こっている。

キョウダイ名の通時的变化については、すでにいくつかのケースに触れてきたが、以下に、複合・多項型を中心にこのようなキョウダイ名タイプの通時的背景を探ってみたい。

最後に、これまでに扱ったキョウダイ名タイプの地域・語族分布の全般的な概観については、別表【キョウダイ名タイプの地域・語族分布】を参照されたい。

### 3 主な言語圏におけるキョウダイ名タイプの変化

別表を見ると分かるように、同じ語族の中でキョウダイ名タイプの変動が大きいのは、大規模な語族としてはアフリカではニジェール・コンゴ、ユーラシアとオセアニアでは、チベット・ビルマ、オーストロネシア、パプア諸語である。この中で、多項型 (= Gm 型) のキョウダイ名が見られるのは、ほとんどチベット・ビルマ諸語に限られる。まずこの語族から見ていこう。

#### 3.1 チベット・ビルマ諸語

現在のチベット・ビルマ諸語は、カレン語に B 型が集中して現れるのを除けば、全体として C 型ないし D 型が最も優勢であり、その分布に地域的な偏りも認められない。一方、すでに見た多種多様な複合・多項型は、各地にきわめて散発的な形で現れ、それらが古い言語特徴の残存であることをはっきり示している。

現在のチベット諸方言のキョウダイ名は、諸家の記述(たとえば北村・長野 1990、星野 1995)を見るとほぼ一様に C 型と解釈されるが、Grierson の記述した西部チベットのラダキー方言は、すでに見たようにギリヤーク型であり、また、Benedict (1942:314) によれば、古典チベット語のキョウダイ名は次のようであったとされる。

phu, jo 「男性から見た兄」 ~ che 「女性から見た姉」 ~ nu 「年下キョウダイ」  
miŋ 「女性から見た男キョウダイ」 ~ sriŋ 「男性から見た女キョウダイ」

これは形としては、G4 型とギリヤーク型の間間的なタイプである。この中で sriŋ (男性から見た女キョウダイ) は、現在でもいろいろな言語の中

に意味や用法を変えながら生き残っている。

ちなみに、Fu(1990:7)によって示された中国雲南省の永寧納西(Yongning Naxi)族のキョウダイ名は、古典チベット語と逆に同性年下側に「男性から見た弟」～「女性から見た妹」を区別するという特異な形をとっている。すなわち、

emy「同性年上」～ gizz「男性から見た弟」～ gomi「女性から見た妹」  
muzz「女性から見た男キョウダイ」～ nimi「男性から見た女キョウダイ」

手許のデータで見る限り、現在のチベット・ビルマ諸語の中で典型的なG4型キョウダイ名は、一部男性話者に偏ったと見られる変則的なケース以外には、見当たらない。しかし、上に見た Benedict による古典チベット語のキョウダイ名の解釈が正しいとすれば、チベット・ビルマ語本来のキョウダイ名は、古典チベット語のやや異常なタイプよりもむしろ正常なG4型であったと考える方がはるかに自然である。この語族におけるキョウダイ名の通時的背景に関する詳細は、専門家の今後の検討に任せなければならないが、手許のデータから判断する限り、チベット・ビルマ諸語のキョウダイ名は、全般的に、性差の関与する古いキョウダイ名(おそらくG4型)からその性差の原理を衰退させて、年齢・性別に基づくD型キョウダイ名の方向へ確実に推移しつつあるとだけははっきり言えるであろう。

### 3.2 オーストロアジア諸語とミャオ・ヤオ諸語

オーストロアジア諸語のデータは決して十分ではなく、とくにヴェトナム南部のバフナル語派やマレー半島のアスリ語群のデータが欠けている。

この語族の中で性差の関与するキョウダイ名は、典型的なG4型がニコバル語に見られるのを除くと、ムンダ諸語の中にいくつかの複合・多項的変種が現れるだけである。その中で、サンタル語のキョウダイ名は、Bodding(1932-6)によれば、

dada「兄」～ aji「姉」～ boko「年下キョウダイ」  
misera「男性から見た女キョウダイ」

となって、後に見るアイヌ語とほぼ同じ構成である。しかし別の現代語

話者の調査では、

**dada**「兄」～**day**「姉」～**bokom**「弟」～**misera**「妹」

という完全なD型も現れている(峰岸私信)<sup>27</sup>。

「男性から見た女キョウダイ」が「(男性から見た)妹」へと意味を変え、D型のキョウダイ名の中に組み込まれていくのは、性差の関わるキョウダイ名の通時的变化の中で最も多く現れるパターンであり、現在のムンダ諸語の中にはその様々な段階が現れている<sup>28</sup>。

ミャオ語のキョウダイ名は、手許のデータを見ると

**tij**「同性の年上キョウダイ」～**kwv**「同性の年下キョウダイ」

**nu(s)**「女性から見た男キョウダイ」～**muam**「男性から見た女キョウダイ」

という形がその本来のタイプと見られ、これは少なくともインドシナ半島で話されているミャオ諸語ではまだそのまま維持されている(Heimbach 1969, Lyman 1974)。

しかし、中国南部およびタイ北部のヤオ語は「男性から見た女キョウダイ」が「妹」の意味に転化してアイヌ型に変わり(Lombard & Herbert 1968, 黄 1992)、一方海南島で話されるムン(門)語(ヤオ系)は、すでに見たように「女性から見た弟」をもつ稀な5項型である<sup>29</sup>。

なお、タイ諸語以外のタイ・カダイのデータが不足しているが、海南島のオンペー(臨高)語が「妹」の部分に性差の現れるアイヌ型のキョウダイ名を示しているのは注目に値する(Hashimoto 1980:193)<sup>30</sup>。

<sup>27</sup> この中の day はヒンディー語からの借用。一方、Nagaraja (1999) の記述によれば、サンタル語に近親なコルク語では「年下キョウダイ」が boko「弟」と bokoje「妹」に分化する一方で misera が失われて D 型へ推移しているようである。

<sup>28</sup> 山田 (1963) によると、ムンダ諸族のキョウダイ名は一律に D 型とされているが、これはおそらく性差の特徴が見過ごされたものである。

<sup>29</sup> ムン語の nao「女性から見た弟」はおそらく「女性から見た男キョウダイ(ミャオ語で nu)」から意味変化したものである。

<sup>30</sup> そのキョウダイ名を参考までに挙げると以下のようである。

**enjo**「兄」～**foi**「姉」～**tok**「弟」

**ko**「男性から見た妹」～**m̄ai**「女性から見た妹」

この中で m̄ai「女性から見た妹」はおそらく中国語から新たに借用されたものである。とすれば、その前段階はすでに触れた中央ユビック・エスキモー語、あるいは後に述べるアイヌ語と同じタイプだったと見られる。

### 3.3 エスキモー・アリュート諸語

エスキモー・アリュート諸語のデータは10あまりで、すでにそのいくつかの例を提示した。これで見ると少なくとも東および西アリュート語、アラスカ北部海岸のイヌイト・エスキモー語、一部のクピック・エスキモー語、カナダのカリブー・エスキモー語などがG4型のキョウダイ名を保持している。しかしカナダ東部とグリーンランドでは性差の特性を保持しながら、すでに見た特異な多項型(グリーンランド型)へと推移し、一方、アラスカでは性差の特性を弱めながらC型からD型へと推移しているように見える。ちなみに、蒲生(1964)によればアラスカのエスキモー諸方言のキョウダイ名は一律にD型(またはC型)とされているが、これは性差の特性が見過ごされたのか、あるいは実際の言語使用ではすでに性差の特性が失われてしまったのか定かでない。一方、19世紀末のアラスカ北部海岸の調査に基づいたWells & Kelly(1890)のエスキモー語語彙集を見ると、そのキョウダイ名は紛れもなくG4型である<sup>31</sup>。

### 3.4 環日本海諸語

ここで「環日本海諸語」というのは、琉球語を含む日本諸方言、アイヌ語、朝鮮語そしてギリヤーク語の総称である<sup>32</sup>。

すでに述べたように、現代日本語のキョウダイ名は、本土方言でD型、八丈島でC型、琉球語でG4型という3つのタイプが現れるが、本土方言のD型は日本語に本来備わったものではない。

周知のように、奈良時代の日本語のキョウダイ名は明らかに現代と違っていた。この時代にキョウダイを表す基本的な名称は全部で6種類あった。すなわち、年上キョウダイを表す名称として、現代語にそのまま伝存した「アニ」「アネ」のほかに「エ(ye)」があり、年下キョウダイ名として「オト」があった。これと並んで、男性から見た女キョウダイとして「イモ」

<sup>31</sup> エスキモー祖語の基本的なキョウダイ名はおそらく次のような形で再構できるであろう。

\**aŋayuy* 「同性の年上キョウダイ」 ~ \**nukar* 「同性の年下キョウダイ」

\**nayay* 「男性から見た女キョウダイ」 ~ \**anəŋar* 「女性から見た男キョウダイ」

しかし、多くの方言でこの中の *nayay* は「(男性から見た)妹」、一方 *anəŋar* は「(女性から見た)兄」という方向で変化したようである。なお、これらの語の諸方言における対応については、Fortescue et al. (1994) の該当項目を参照。

<sup>32</sup> 環日本海諸語の概念とその言語的性格について詳しくは拙論(2000:110ff.)を参照されたい。

女性から見た男キョウダイとして「セ」をもっていた。ただし、奈良時代に「イモ」と「セ」はキョウダイ名としてだけでなく、親しい異性、恋人、さらには妻、夫というような比喩的、擬制的な意味でも使われている。

『日本書紀』巻15(仁賢紀六年)に異国へ旅立つ夫(=母の異母兄弟)との別れを嘆く飽田女の次のようなことばが引用されている。

「母(オモ)にも兄(セ)、吾(アレ)にも兄(セ)。若草のわが夫(ツマ)はや」

ここで「セ」は前者では「女性から見た男キョウダイ」、後者では「夫」という違った意味で用いられている。これに対する書紀の注釈は次のようである。

「古者不言兄弟長幼、女以男称兄、男以女称妹」(古八兄弟長幼ヲ言ハズ、女八男ヲ以ッテ「セ」ト称シ、男八女ヲ以ッテ「イモ」ト称ス)。このような注釈が必要だったことは、すでに奈良時代のキョウダイ名が変遷途上にあつたことをはっきり示している。それでは注釈者のいう「古(イニシヘ)」の日本語のキョウダイ名はどのようなものだったか。それは次のような構成だったと見てほぼ間違いないであろう。

エ「同性の年上キョウダイ」～オト「同性の年下キョウダイ」

イモ「男性から見た女キョウダイ」～セ「女性から見た男キョウダイ」

しかし、奈良時代には「エ」と並んで年上だけに男女を区別する「アニ」「アネ」が現れ、同性側がC型へと推移して、すでにギリヤーク型のキョウダイ名が現出していた。「エ」はもっぱら複合語の中で使われ(たとえばエ・ヒメ～オト・ヒメ、エ・ウカシ～オト・ウカシ)、単独の用法は廃れかかっていたのである。

平安時代以降になると、この体系からさらに「セ」が脱落し、一方「イモ」は「男性から見た女キョウダイ」という本来の用法を縮小して年下の女キョウダイ＝「妹」という方向で、D型キョウダイ名へと組み込まれていった。これは現代のユピック・エスキモー語やヤオ語に見られるキョウダイ名にほかならない。本来「エ」の対語であった「オト」がオトヒト(>オトウト)と形を変えたのに歩調をそろえて、「セ」という対語を失った「イモ」もイモヒト(>イモウト)となり、ここに「オトウト～イモウト」は年下の男・女キョウダイを表す新しい対語として生まれ変わった。

一方、キョウダイ名から離脱した古い「イモ」と「セ」は、やや詩的・情緒的なニュアンスを帯びた配偶者の意味で生き残った。「異性のキョウダイ」を表す名称が比喩的に恋人や配偶者の意味を帯びるのは、アイヌ語や琉球語の場合も同じであり、性差の関与するキョウダイ名にとってけっして珍しい現象でない<sup>33</sup>。一方、年上の男女キョウダイの名称として現れた「アニ」「アネ」の来源は今のところ不明であるが、多くの言語に類例が見られるように、おそらく幼児の呼称法に由来するものであろう<sup>34</sup>。

なお、アイヌ語のキョウダイ名は、古謡や物語の『雅語』では

yup「兄」～sa「姉」～ak「年下キョウダイ」

tures「男性から見た女キョウダイまたは妹」

という4つの基本名称からなっており、これは先に見たアラスカ中央ユピック語と同じ構成である。諸方言に現れる mat-ak「女性から見た妹」は、tures が男性話者の妹の位置に組み込まれ、ak が「弟」の意味に特化したために、新しく作り出されたものであろう。この推移のプロセスは、奈良・平安時代の日本語の場合とほぼ軌を一にする<sup>35</sup>。

一方朝鮮語のキョウダイ名は、通常の解釈に従うと、年上キョウダイの側だけに性差に基づく3ないし4種の名称をもつ世界でもきわめて稀なタイプということになる。しかしこのキョウダイ名は、私見によれば、漢語からの借用語である hieong「兄」と dongsaeng「同生」が導入されたため

<sup>33</sup>たとえば、多くのポリネシア諸語で「男性から見た女キョウダイ」と「妻」を表す語は密接につながっている。

<sup>34</sup>日本語のキョウダイ名の通時的変化を要約すれば、概略次のような4段階の推移として表すことができよう。

1) G4型(先史日本語): 上掲

2) ギリヤーク型(奈良時代):

アニ「兄」～アネ「姉」～オト「年下キョウダイ」

イモ「男性から見た女キョウダイ」～セ「女性から見た男キョウダイ」

3) ユピック型(平安時代):

アニ「兄」～アネ「姉」～オト「年下キョウダイ」

イモ「男性から見た女キョウダイまたは妹」

4) D型(現代):

アニ「兄」～アネ「姉」～オトウト「弟」～イモウト「妹」

<sup>35</sup>アイヌ語方言のキョウダイ名については、服部(1964:42f.)に詳しい記述が見られる。なお、田村(1996:739)によれば、アイヌ語沙流方言では雅語形の tures には「いとしい女性、恋人、妻」という比喩的用法があるが、現代語の matapa にはそのようなニュアンスはないという。ちなみに、mat-apa、mat-ak の mat-は「女」の意味。

に、本来の体系に大きな変動が生じた結果のように思われる。これら漢語が導入される前の朝鮮語に固有のキョウダイ名は、基本的には次の4種であり、その構成はおそらく次のような形であった。

**eonni**「同性の年上キョウダイ」～ **au**( < **azv** )「同性の年下キョウダイ」  
**nuui**「男性から見た女キョウダイ」～ **orabi**「女性から見た男キョウダイ」

これは紛れもなく G4 型のキョウダイ名であるが、この体系が現代語で崩れてきたのには、様々な要因が絡んでいる。ひとつには、おそらく男性中心の formal な用法として兄 = **hieong** と並んで導入された漢語の同生 = **dongsaeng** が本来の中立・総称名から年下キョウダイの名称として **au** にとって代わり、これによって同性・異性の区別が曖昧になったことが考えられる。もうひとつの要因は、朝鮮語の敬語法との関わりで、同じ名称が中立(ないし卑)称と敬称に分化し(たとえば **nuui** に対する **nuunim**、**orabi** に対する **orabeoni** のように)、これが本来年齢差を設けない異性のキョウダイ名に目上 = 年上 ~ 目下 = 年下という区別を生み出すことになった。敬称は、幼児の呼称法と同じく年上にしか適用されず、空白となった年下キョウダイの指示称として中立・総称名の「同生」が役立てられたわけである。これは八丈島における「キョーデア」やトルコ語の **kardeş** の用法と軌を一にする。しかし、敬称的意味合いを全くもたない **nuui**、**orabi** は、**dongsaeng** と並んで今でも年下の異性キョウダイ、すなわち「妹」「弟」を指して用いることは可能であり、従って **dongsaeng** は年下キョウダイ専用の名称として確立されているわけではない<sup>36</sup>。

なお、現代語で **orabi/orabeoni** と並んで「女性から見た兄」を表す **oppa** は、おそらく幼児の呼称に由来する名称で、呼称である限り年上にしか適用されない。このように、朝鮮語のキョウダイ名は、指示称のほかに敬称や呼称法が複雑に絡み合っていて、本来の体系が一層不透明になっているといえよう。

<sup>36</sup> 柴田(1968:8)に示された朝鮮語キョウダイ名の図では、**nuui** と **orabi** は年下側で **dongsaeng** と重なっている。なお、Sohn(1994:533)では **nuui** だけが「男性から見た女キョウダイ」とされている。

### 3.5 オーストロネシア語族

ユーラシアの太平洋沿岸言語圏の中で最後に残された大規模な言語圏はオーストロネシア語族である。これは太平洋沿岸部からオセアニアの広大な地域に拡がり、キョウダイ名のデータも最も豊富である<sup>37</sup>。その中には主要なほとんどすべてのタイプが現れ、その多様性は世界諸言語の中でも群を抜いている。しかし、この多様なキョウダイ名の中で最も優勢なのはG4型のキョウダイ名であり、一方D型とそれと密接に結びついた複合・多項型(Gm)はここにはほとんど現れない<sup>38</sup>。

この言語圏におけるキョウダイ名タイプの分布を概観すると、台湾からフィリピンを経てインドネシア西部からマレー半島まではB型が優勢であり、一方オセアニアの地域には、性差の関与する様々なタイプが現れる。その中で最も優勢なG4型は、ポリネシアを中心にそこからソロモン諸島を経てハルマヘラ島、フィリピンのミンダナオ島、さらにモルッカ海峡を通過してセラム、チモール、フロレスの諸島まで拡がっている。このG4型のキョウダイ名は、その周辺部でとくに、年齢差の特性を失う形で単純化が進んだように見える。それが最も徹底して行われたのはミクロネシアとニューギニア北岸からビスマーク諸島を含むメラネシアの地域であり、ここにはF2型が最も集中する。ここからニューカレドニア、バヌアツそしてポリネシア外周部(アウトライアー)にかけてG4型と混在しながら様々な中間的タイプが現れる。

今から半世紀以上前にオセアニア諸語のキョウダイ名を詳細に観察したMilkeによれば、オーストロネシア語族の中のおセアニア語群は、その祖語(彼の命名でUrmelanesisch)の段階でポリネシアに見られるG4型のキョウダイ名をすでに確立していた。しかし、これはオセアニア語派における独自の発達であり、オーストロネシア祖語にまで遡るものではないとされた。彼の見るところ、西の語派にはこのタイプのキョウダイ名が全く現れなかったからである。しかしその後、西のグループにも性差の関与す

<sup>37</sup>この言語圏のキョウダイ名・親族名称に関しては、個別の辞書、文法記述のほかに、Elkins & Hendrickson (1984) [既出]、Mead (1934)、Milke (1938)、Firth (1970)、Epling et al. (1973)、Marshall (1983)、Gregerson (1993)、Tryon (1995)、Gregerson & Sterner (1997)などに多くのデータが集められている。

<sup>38</sup>この事実は、Gm型キョウダイ名の発生がG3ないしG4型からとりわけD型への推移過程で行われたことを逆の面から裏付けている。

るキョウダイ名が上述のミンダナオ、セラム諸島だけでなくほかの地域でも少数ながらその存在が知られるようになった。たとえば、ボルネオのンガジュ語(Ngaju=Land Dayak)、マレー半島のマレー・ダヤク語、スマトラのトバ・バタク、カロ・バタク語、ボルネオから発祥したとされるマダガスカルのマラガシュ語(ただし F4)などである。また現在では C(ないし B)型のマレー語も、中期語の段階で少なくとも一部の方言が G4 型のキョウダイ名をもっていたことが知られている(Adelaar 1992:121)。

このようなわけで、比較的近年にオーストロネシア諸語の親族名称とその通時的背景に詳細な検討を加えた Blust によれば、少なくとも「マレー・ポリネシア祖語」には G4 型のキョウダイ名が再構できるとされた。しかし、Blust のいう「マレー・ポリネシア祖語」は台湾の高砂諸語を別格に扱う独自の解釈に基づくもので、オーストロネシア祖語と同義ではない。現在の高砂諸語には、確かに性差に基づくキョウダイ名の確実な例証は見つからないようである(土田私信)。しかし、高砂諸語の例証だけでオーストロネシア祖語に G4 型キョウダイ名の再構をためらうのは、やや台湾にこだわった見方ではあるまいか。世界諸言語で起こったいろいろなキョウダイ名の推移を見ても、性差型のキョウダイ名(G3 ないし G4 型)が性差の特性を失って B 型に移行したと見られるケースは、東南アジアだけでなくアフリカにも数多く見られる。しかし、もともと B 型だったキョウダイ名が新たに性差の特性を獲得して G 型に変わったと見られる例は、少なくとも手許のデータの中で確認することは困難である。それどころか、様々な語族のキョウダイ名を含めた親族名称の比較研究の中で、B 型のキョウダイ名が祖語に想定されたという例は、管見の限り、ほとんど知られていない<sup>39</sup>。ここからさらに推論を進めれば、どうやら B 型のキョウダイ名は性差の関与するキョウダイ名が性差を喪失するという形でしか発生しなかったという可能性もなくはない。いずれにせよ、オーストロネシア諸語に現れたキョウダイ名の多様な分布は、G4 型を祖形としてそこか

<sup>39</sup> タイ諸語はほぼ全般的に B 型のキョウダイ名を示し、これを祖語の段階まで導くことは可能であるが、タイ・カダイ語族の全体がこのタイプを最初からもっていたという保証は全くない(すでに述べたように海南島のオンペー語には性差型のキョウダイ名が現れている)。チベット・ビルマ語の中のカレン語の B 型は、明らかに性差を失った結果である。

らの分岐発達という形で最も無理なく説明できるであろう<sup>40</sup>。すなわち、概略的に、西のグループでは性差の原理が衰退ないし消滅することによって全般的にB型の方向へと推移し、メラネシアとミクロネシアでは年齢差が失われることによってF型の様々な変種が現出したと見られる。メラネシアにおけるこのような変化の背後には、おそらくパプア系の土着言語の影響が働いていたかもしれない<sup>41</sup>。

### 3.6 その他の言語圏

オセアニアを含めた太平洋沿岸部と並んで、キョウダイ名の多種多様な分布を示すのはアメリカ大陸である。ここで典型的なG4型あるいはそれに近いタイプのキョウダイ名は、すでに述べた一部のエスキモー・アリュート諸語以外では、これに接する北西海岸のハイダ、トリンギット、ツィムシャン、クワキユートルなどの諸言語<sup>42</sup>と一部のカリフォルニア諸語、そして北米東南部のメキシコ湾に臨む「湾岸諸語」だけである。一方、アサバスカ諸語、ユート・アステカ諸語そしてイロコイ諸語は、D型が最も支配的であるが<sup>43</sup>、アサバスカ語族の中で南西部に進出してプエブロ・インディアン文化圏内に入ったアパチー系諸言語やイロコイ語族の中で南東部に孤立するチェロキー語は、すべて性差型のキョウダイ名を示している。これはおそらく地域の特徴を二次的に獲得した結果であろう。北米

<sup>40</sup> ちなみに、Blust (1980:240) が“マレー・ポリネシア祖語”に想定したキョウダイ名は次のようである。

\*kaka/aka 「同性の年上キョウダイ」 ~ \*Sua(n)ji 「同性の年下キョウダイ」

\*ñaRa 「女性から見た男キョウダイ」 ~ \*be(t)aw 「男性から見た女キョウダイ」

<sup>41</sup> なお、ポリネシアのキョウダイ名タイプの通時変化に関して、Epling et al. (1973:1619ff.) はただ形式的に、単純なタイプから順次複雑なタイプへ推移したと解釈しているが、これは当時の構造主義者流の形式論の招いた全く見当はずれな推測である。

<sup>42</sup> これらの北西海岸諸語のキョウダイ名および親族名称については、Boas (1891), Sapir (1920), Durlach (1928), Emonds (1945(=1991)) などに記述が残されている。この中で、トリンギット語は Boas (1891) によればほぼ G4 型、Emonds (1945) によれば G4 型の「同性の年上キョウダイ」が男性話者と女性話者の間で分岐した次に見るような変則的な形をとっている(これはすでに述べた Benedict による古典チベット語のキョウダイ名と同じタイプ)。

hunxw 「男性の同性・年上」 ~ shatx 「女性の同性・年上」 ~ kik' 「年下キョウダイ」

lak' 「男性から見た女キョウダイ」 ~ 'ik 「女性から見た男キョウダイ」

ちなみに、トリンギット語とその北方で隣接するイーヤック語のキョウダイ名もこれに類したタイプのものである。

<sup>43</sup> アサバスカ諸語の親族名に関しては、Hojjer (1956), Dyen & Aberle (1974) が詳しい。また Dyen & Aberle はアサバスカ祖語に D 型キョウダイ名を再建している。

の南東部からメキシコ北部におよぶ南西部は、G4型かそれに近い性差型のキョウダイ名の集中的な分布域だったと思われる。

カリフォルニアの親族名称に関しては、Gifford (1922) の詳細な研究が残された貴重な資料である。これを見ると、この地域のキョウダイ名はD型とC型が最も優勢で、その中にいわば虫食い状に性差の絡んだ様々なタイプが散在する。この点でチベット・ビルマ語圏のキョウダイ名の分布とやや共通した面がある。しかし、ここは言語の系統関係が最も複雑に入り組んだ地域だけに、これらのキョウダイ名の通時的背景を探るのは容易でない。ただ、他の地域のキョウダイ名変化から類推して、ここでも全般的に性差型からC型ないしD型への推移が行われた可能性は高いといえよう。

中米ではオトマンゲ以外の諸言語のデータがまだ不足しており、その分布の正確な把握は、南米諸言語の場合と同様、今後の調査に待たなければならない。

アフリカで最も多様なキョウダイ名の分布を示すのは、ニジェール・コンゴ語族である。しかし全般的に眺めると、その分布はオーストロネシア語族のそれと近似している。すなわち、およそニジェール川を境としてそれより西の非バントゥー系諸言語と東側のバントゥー語圏とでキョウダイ名のタイプが大きく分かれ、東のバントゥー語圏ではG3ないしG4型が優勢であり、西側のアトランティック、グル・マンデ、イジョ、イグボなどのグループではA型、B型あるいはD型が現れ、性差型はほとんど見られない。この関係はオーストロネシア語族内の東のオセアニア語派と西のインドネシア語派のそれとほとんど同じである。そしてここでも、キョウダイ名のタイプは性差型から非性差型へという方向で推移したと解釈できるであろう。ただ、オセアニアとバントゥー語圏の違いは、オセアニアのG4型に対してバントゥー語圏ではG3型が圧倒的に優勢だという点にある。ニジェール・コンゴあるいはバントゥー祖語のキョウダイ名がどのようなタイプだったか、その究明は専門諸家の今後の検討にゆだねよう。

最後に、ニューギニア島を中心とするパプア語圏とオーストラリア原住民語について触れると、パプア諸語のキョウダイ名の分布も複雑多岐であるが、言語数に比べてデータが不十分なため今のところその分布の性格

をはっきり掴むことができない。ごく大まかにいうと、ニューギニア山地の北側からニューブリテン、ビスマーク島におよぶ北部一帯は、性差型のキョウダイ名が圧倒的に優勢であり、一方その南側にはD型やC型(あるいはE型)が多く現れるようである。また北部の性差型キョウダイ名は、オーストロネシア語と違って、年齢差の関与しないF型であった可能性が高い。

オーストラリア原住諸言語のキョウダイ名は、全般的にC型とD型が優勢で、性差型のキョウダイ名の確実な例は手許のデータで見ると皆無である<sup>44</sup>。ただし、オーストラリアのC型キョウダイ名の中には、他の地域には類例のないきわめて奇異な用法がある。それは、全体として見ると「兄～姉～年下キョウダイ」という3種の名称から構成されているけれども、男性話者と女性話者とでその使い方が異なる。すなわち、概略的に、男性話者は「姉」に当たる名称を年齢差を無視して「女キョウダイ」の意味に使い、一方女性話者は「兄」の名称を同じく「男キョウダイ」の意味に用いる。つまり、C型キョウダイ名が男性話者と女性話者の間であたかもG4型のごとく使い分けられている。このようなC型の用法は、この大陸の北西部アーネムランドとその周辺にかなり広く分布しているようである。これをキョウダイ名タイプ全体の中でどう位置づけるか難しい問題であるが、おそらく幼児の呼称体系が成人してから違った使われ方をした結果生じたものかもしれない<sup>45</sup>。

<sup>44</sup>オーストラリア原住民諸語の親族名称は、個別言語の記述文法にも数多く取り上げられているが、とくに親族名称を扱ったまとまった研究としては、Warner (1933), Scheffler (1978), Testart (1996) などがある。とりわけ Warner (1933) は北部諸言語の親族名称の資料として貴重である。

<sup>45</sup>Merlan (1982, 1994) で記述された男女間でやや異常な偏りを見せるマンガラ語やワルダマン語のキョウダイ名もこのタイプの変種と見ることができよう。たとえばマンガラ語のキョウダイ名は Merlan (1982:223f.) によれば、wawa, yaba, baba の3種類であるが、その用法は、男性話者にとっては

wawa「兄」～ yaba「弟」～ baba「異性=女キョウダイ」

女性話者にとっては

baba「姉」～ yaba「兄、弟、妹」

のようになるという(Merlan 1994:102f. で示されたワルダマン語のキョウダイ名もほとんど同じ形)。この女性話者の偏ったシステムは、おそらく baba「姉」～ yaba「妹」～ wawa「異性=男キョウダイ」という形から変化したものであろう。そしてこのキョウダイ名は幼児語や呼称のシステムでは、

wawa「兄」～ baba「姉」～ yaba「中立総称名=年下キョウダイ」

というような形をとっていたのではなからうか。ちなみにこれらの言語ではすでに若年

#### 4 むすび

以上ごく大まかながら、諸言語圏におけるキョウダイ名タイプの分布とそこから推定される通時的变化について概観した。これによって、小論の出発点となった日本列島とその周辺部に現れたキョウダイ名の一見奇異とも見える多様性がどのようにしてもたらされたかという問いは、ある程度納得のいく解答が与えられたと思う。環日本海域における多種多様なキョウダイ名は、実はすべて同じ性差に基づく典型的な G4 型キョウダイ名を基盤として、そこからほぼ一様に、年齢・性別に基づく C 型ないし D 型の方向へ推移していくその様々な段階を反映したものにほかならない。この多様性はかえって、これらの言語の親近性ないし類縁性の強さを裏付けるものといえよう。

環日本海域におけるキョウダイ名の多様性は、さらに視野を拡げれば、実はユーラシアの太平洋沿岸部で起こったキョウダイ名タイプのもっと大規模な変遷の縮図にすぎない。すなわち、チベット・ビルマを含めて、オーストロアジア、オーストロネシア、ミャオ・ヤオ、そしておそらくタイ・カダイの諸言語を大きく巻き込んで、同じような変化が行われたと見られるからである。性差型キョウダイ名のプロトタイプともいえるべき G4 型は、環日本海域では辛うじて琉球諸島に生き残ったが、同じように、オセアニアを含めた太平洋沿岸地域においても、このタイプはオセアニアの最も周辺部に属するポリネシア、インド洋に浮かぶニコバル諸島、インドシナ半島北辺のミャオ語圏、そしてカムチャツカ、チュクチ半島<sup>46</sup>にしか現れず、典型的な周辺分布の様相を呈している。

しかしまた、ユーラシアの太平洋沿岸部をその内陸部からはっきり隔てるこの性差型のキョウダイ名は、そこから派生した様々な多項型変種を含めて、その分布をアメリカ大陸へと拡げている。事実 G4 型キョウダイ名も、すでに見たようにカムチャツカ半島からアリューシャン列島を経て北米北西海岸へと明らかに連続した分布を見せている。ユーラシアの太平洋

層の話者はいなくなっている。

<sup>46</sup> チュクチ・カムチャツカ諸語では、目下のところ、チュクチ語のほかにコリヤーク語 (Zhukova 1967, 1980) とカムチャダル (= イテリメン) 語 (Worth 1969) で G4 型キョウダイ名の存在が確認されている。参考までにカムチャダル語の例を挙げておこう。

silatumx/zlatmux 「同性年上キョウダイ」 ~ imtx/emtx 「同性年下キョウダイ」

qitline 「女性から見た男キョウダイ」 ~ lilixλ/lelexλ 「男性から見た女キョウダイ」

沿岸部とアメリカ大陸を結んでいわば「環太平洋」的な分布を見せる言語的特徴は、まだほかにもいくつか挙げられるが、キョウダイ名という親族名称の最も核心的な部分においても、同じような分布が見られることはきわめて注目すべきである<sup>47</sup>。

最後に、これまで主たる関心事となってきたキョウダイ名の多様性と関連して、そのもう一つの側面である普遍性の問題に立ち返ってみたい。この問題はすでに第2節で、理論上可能であるが実際には検証されないキョウダイ名タイプに関する議論の中でその都度取り上げてきたので、ここでもう一度それを整理して小論を締めくくりたい。

人類言語のキョウダイ名に関する一般原則としては、次のような箇条が挙げられるであろう。

- (1) 年齢差と性別が関与するキョウダイ名において、性別は常に年上側が優先される。
- (2) 男性・女性の区別を主体とする文法性(gender)をもつ言語において、選択されるキョウダイ名はほとんど常に性別2項型である。
- (3) 性差と性別が関与するキョウダイ名において、性差は常に性別に優先する。
- (4) 性差と年齢差が組み合わされたキョウダイ名において、年齢差は同性側にしか現れない。
- (5) 同じシステムの中でキョウダイを表す名称の最適な数は4までである。

この普遍性は、基本的な名称が4を越える複合・多項型キョウダイ名があらゆる変種を通じてその出現頻度がきわめて低いこと、それは多くの場合キョウダイ名タイプの推移過程で現れた過渡的な姿であって、タイプとしての安定性を欠いているという事実から導かれたものであるが、これは同時にまた、あらゆるキョウダイ名は、男性話者と女性話者のそれぞれの側から見れば、そこで区別される基本的名称はけっして4を越えないという普遍的事実根ざしている。

<sup>47</sup>ユーラシアにおける「太平洋沿岸言語圏」の言語的諸特徴とその「環太平洋」的な拡がりについては、拙論(2000)を参照。

ちなみに、性差、年齢差、性別という3つの成分を4種の名称の中に組み込んだG4型のキョウダイ名は、このような様々な条件を満たしながらぎりぎりのところで均衡を保った人類言語のキョウダイ名のひとつのプロトタイプとってよいであろう。

(6) 性差を主成分とするキョウダイ名において、名称の全部ないし一部は男女話者間で必ず鏡像(ないし相称)分布をなす。一方、話者の男女差だけに基づくキョウダイ名は、男女話者間で相補分布をなすだけである。

性差と話者の男女差は、これまでも度々触れたように、重なり合うけれども完全に同じではない。その違いがはっきり現れるのが上述の男女話者間での名称の分布である。ここで鏡像分布とは、同じ名称が男女話者間で性別に関して正反対の対象を指すことである。一方、相補分布は同じ指示対象に関して男女話者間で違った名称が現れるだけで重なることはない。このような男女話者間でのキョウダイ名称の完全な分離ないし乖離は、性差の特性が別のタイプのキョウダイ名の枠組みの中に部分的に組み込まれることによってもたらされる。多項型のキョウダイ名は、男女話者間でのこのような名称の分離によって現出し、その結果・性差は単なる話者の男女差に転化する。性差はその本来の機能を失って、言語使用における男女差という別の社会言語学的機能を帯びるのである。先に見たセリ・ダコタ型は、この方向を局限まで押し進めたキョウダイ名とってよいだろう。



別表:【キョウダイ名タイプの地域・語族分布】(44ページの続き)

地域	語族・言語群	性差非関与型					性差関与型							合計
		A型	B型	C型	D型	E型	F型:性差(・性別)				G型:性差・年齢			
		中立1	年齢2	年性3	年性4	性別2	F2	F3a	F3b	F4	G3	G4	Gm	
北米	エスキモー・アリユート	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	5	5	10
	アサバスカ	/	/	/	19	/	2	1	/	/	1	/	5	28
	アルゴンキン	/	2	4	2	/	/	/	/	/	/	/	12	20
	イロコイ	/	/	1	7	/	/	1	/	/	/	/	/	9
	スー・カド	/	/	/	/	1	/	/	2	1	/	/	14	18
	北西海岸諸語	/	5	/	4	/	/	2	/	/	8	2	8	29
	ベヌート諸語	/	/	7	13	/	/	/	/	/	2	/	5	27
	ホカ諸語	/	2	5	7	/	/	/	/	/	1	1	5	21
	南東湾岸諸語	/	/	/	/	/	/	/	/	1	1	5	/	7
	カイオウ・タノア	/	/	3	3	/	/	1	/	/	/	/	/	7
ユート・アステカ	/	4	1	13	/	/	/	/	/	/	/	8	26	
その他北米諸語	1	/	/	1	1	/	1	/	1	/	/	1	6	
中米	マヤ	/	1	2	2	/	/	/	/	1	/	1	2	9
	ミヘ・ソケ	/	/	2	/	/	/	/	/	/	/	/	/	2
	オトマンゲ	4	1	7	/	4	/	32	/	4	/	1	2	55
	その他中米諸語	1	2	/	/	/	/	/	/	1	1	/	/	5
南米	チブチャ・バエザ	4	/	/	/	1	3	1	/	/	4	1	6	20
	トゥカノ	/	1	/	3	1	/	/	/	/	/	/	/	5
	カリブ	/	/	/	/	1	/	/	1	1	/	1	4	8
	アラワク	/	2	2	7	/	/	1	/	/	2	/	1	15
	トウピ・グアラニ	1	/	/	/	1	/	/	/	/	2	1	7	12
	マクロ・ジェー	/	4	/	2	2	/	/	/	1	/	1	/	10
	アンデス諸語	1	/	/	1	1	/	1	/	2	/	/	/	6
	その他南米諸語	/	/	2	5	/	/	1	/	/	1	/	/	9
	ビジン・クレオール	1	/	/	2	11	3	/	/	/	/	/	/	17
総計	83	165	171	242	282	59	57	19	24	135	118	124	1479	
百分率(%)	5.61	11.16	11.56	16.36	19.13	10.75 (=159)				25.42 (=376)			100	

## 【参考文献】

- Adelaar, K.A. 1992 *Proto Malayic*. Canberra: Pacific Linguistics, Australian National University.
- Aoki, Haruo 1994 *Nez Perce dictionary*. Berkeley: University of California Press.
- Asher, R.E. 1982 *Tamil* (Lingua Descriptive Series 7). Amsterdam: North-Holland.
- Benedict, P.K. 1942 Tibetan and Chinese kinship terms, *Harvard Journal of Asiatic Studies* 6: 313-337.
- Berger, H. 1998 *Die Burushaski-Sprache von Hunza und Nager, Teil III Wörterbuch*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Blust, R. 1980 Early Austronesian social organization: The evidence of language, *Current Anthropology* 21(2): 205-247.
- Boas, F. 1891 Vocabularies of the Tlingit, Haida and Tsimshian language, *Proceedings of the American Philosophical Society* vol. 24: 173-208.
- Boas, F. & Deloria, E. 1941 *Dakota grammar* (*Memoirs of the National Academy of Sciences*, vol. 23). Washington: Government Printing Office.
- Bodding, P.O. 1932-6 *Santal Dictionary*, 5 vols. Det norske Videnskaps-Akademi Oslo.
- Brant, Ch.S. & Mi Mi Khaing 1951 Burmese kinship and the life cycle: an outline, *Southwestern Journal of Anthropology* 7: 437-454.
- Buck, C.D. 1949 *A dictionary of selected synonyms in the principal Indo-European languages*. University of Chicago Press.
- Burrow, T. & M.B. Emeneau (eds.) 1984 *A Dravidian etymological dictionary*. Oxford University Press.
- Comrie, B. & Corbett, G.G. (eds.) 1993 *The Slavonic languages*. London: Routledge.
- Costa, D.J. 1999 The kinship terminology of the Miami-Illinois language, *Anthropological Linguistics* 41: 28-53.

- Damas, D. (ed.) 1984 *Handbook of North American Indians, vol. 5: Arctic*. Washington: Smithsonian Institution.
- Durlach, Th.M. 1928 *The relationship systems of the Haida and Tsimshian* (Publications of the American Ethnological Society 11).
- Dyen, I. & D.F. Aberle 1974 *Lexical reconstruction: the case of the Proto-Athapaskan kinship system*. London: Cambridge University Press.
- Elkins, E.R. & Hendrickson, G.R. (eds.) 1984 *A sampling of Philippine kinship patterns*. Summer Institute of Linguistics.
- Emmons, G.Th. (edited by Frederica de Laguna) 1945 (=1991) *The Tlingit Indians*. University of Washington Press.
- Epling, P.J. et al. 1973 Genetic relations of Polynesian sibling terminologies, *American Anthropologist* 75: 1596-1625.
- Firth, R. 1970 Sibling terms in Polynesia, *Journal of Polynesian Society* 79: 272-287.
- Fortescue, M. 1984 *West Greenlandic*. London: Croom Helm.
- Fortescue, M. et al. 1994 *Comparative Eskimo dictionary with Aleut cognates*. Fairbanks: Alaska Native Language Center.
- Fu Mao-Ji (百田弥栄子訳) 1990「永寧納西族の母系家族と親族名称」『中国研究月報』49(2): 1-17.
- 蒲生正男 1965「アラスカ・エスキモーの親族名称体系」『民族学研究』29-3: 283-293.
- Gifford, E.W. 1922 Californian kinship terminologies, *University of California Publications in American Archaeology and Ethnology*. Vol.18: 1-285.
- Glover, W. & J.R. Glover 1977 *Gurung-Nepali-English dictionary, with English-Gurung and Nepali-Gurung indexes*. Canberra: Pacific Linguistics, Australian National University.
- Gregerson, M. (ed.) 1993 *Ritual, belief, and kinship in Sulawesi*. Dallas: International Museum of Cultures.

- Gregerson, M. & J. Sterner (eds.) 1997 *Kinship and social organization in Irian Jaya*. Dallas: Summer Institute of Linguistics.
- Grierson, G.A.(ed.) 1903-27 *Linguistic Suvery of India*. Dehli: Motilal.
- Grimes, B.F. (ed.) 1996 *Ethnologue: Languages of the world*, 13th edition. Dallas: Summer Institute of Linguistics.
- Guy, J.B.M. 1976 *Handbook of Bichelamar*. Camberra: Pacific Linguistics, Australian National University.
- Haneda, K. & Ganjelu, A. *Tabrizi vocabulary: an Azeri-Turkish dialect in Iran*. Tokyo: ILCAA.
- Hashimoto, Mantaro 1980 *The Be language: a classified lexicon of its Limkow dialect*. Tokyo: ILCAA.
- 服部健 1967 「ギリヤークの親族呼称法」蒲生正男・大林太良(編)『文化人類学』東京:角川書店:224-232.
- 服部四郎 1964 『アイヌ語方言辞典』東京:岩波書店
- Heimbach, E.E. 1969 *White Meo-English Dictionary*. Ithaca, N.Y.: Cornell University: Southeast Asia Program.
- Hockett, Ch.F. 1964 The Proto-Algonquian kinship system. *Explorations in Cultural Anthropolgy* (ed. by Goodenough, W.H.), New York: McGraw-Hill.
- Hoijer, H. 1956, Athapaskan kinship systems, *American Anthropologist* 58: 309-333.
- 星実千代・星泉 1995 『チベット語彙集』東京:ILCAA.
- 黄布凡 他(編)1992 『藏緬語族語言詞彙』北京:中央民族学院出版社.
- Jacobson, S.A. 1984 *Yup'ik Eskimo Dictionary*. Fairbanks: Alaska Native Language Center.
- Kaji, Shigeeki 1985 *Lexique Tembo I*. Tokyo: ILCAA.
- 1992 *Vocabulaire lingala classifié*. Tokyo: ILCAA.

- 風間喜代三 1984 『印欧語の親族名称の研究』東京：岩波書店。
- Kinkade, M.D. 1992 Kinship terminology in Upper Chehalis in a historical framework, *Anthropological Linguistics* 34: 84-103.
- クレイノヴィチ E. A. (升本哲訳) 1993 『サハリン・アムール民族誌 ニブフの生活と世界観』東京：法政大学出版局。
- 北村甫・長野泰彦 1990 『現代チベット語分類辞典』東京：汲古書院。
- Kroeber, A.L. 1917 California kinship systems, *University of California Publications in American Archaeology and Ethnology* Vol.12, No.9: 339-396.
- 1934 Yurok and neighboring kin term systems, *University of California Publications in American Archaeology and Ethnology* Vol.35, No.2: 15-22.
- Kronefeld, D.B. 1974 Sibling terminology: beyond Nerlove and Romney, *American Ethnologist* 1: 489-506.
- 劉武雄 1978 「同胞称谓—系譜空間の分割理論」『中央研究院民族学研究所集刊』(台北) 45:1-26.
- Lombard, S.J. & H.C. Purnell, Jr. 1968 *Yao-English Dictionary*. Cornell University: Dpt. of Asian Studies (Linguistics Series II).
- Lyman, Th.A. 1974 *Dictionary of Mong Njua: a Miao (Meo) language of Southeast Asia*. The Hague: Mouton.
- Marshall, M. (ed.) 1983 *Siblingship in Oceania: Studies in the meaning of kin relations*. Lanham, New York: University Press of America.
- 松本克己 2000 「世界諸言語の類型地理と言語の遠い親族関係」『言語類型地理論シンポジウム論文集』(遠藤光暁編 <中国における言語地理と人文・自然地理> 7 ): 96-135.
- Mead, M. 1934 Kinship in the Admiralty Islands, *Anthropological papers of the American Museum of Natural History*, v.34.
- Merlan, F.C. 1982 *Mangarayi*. London: Croom Helm.

- 1994 *A grammar of Wardaman*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Merrifield, W.R. 1981 *Proto-Otomanguean kinship*. Dallas: International Museum of Cultures.
- 1985 *South American kinship: eight kinship systems from Brazil and Columbia*. Dallas: International Museum of Cultures.
- Mihalic, F. 1971 *The Jacaranda dictionary and grammar of Melanesian Pidgin*. Milton (Australia): Jacaranda.
- Milke, W. 1938 Die Benennung der Geschwister in den austronesischen Sprachen, *Zeitschrift für Ethnologie* 70: 50-66.
- 宮良信詳 1995 『南琉球八重山石垣方言の文法』東京：くろしお出版.
- Morgan, L.H. 1871 *Systems of consanguinity and affinity of the human family*. Washington: Smithsonian Institution.
- Moser, M.B & S.A. Marlett 1997 Seri dictionary: People and kinship terms. *Work papers of the Summer Institute of Linguistics*, University of North Dakota.
- Murdock, G.P., 1968 Patterns of sibling terminology, *Ethnology* 7: 1-24.
- 1970 Kin term patterns and their distribution, *Ethnology* 9: 165-207.
- Nagaraja, K.S. 1999 *Korku language: Grammar, texts, and vocabulary*. Tokyo: ILCAA.
- 永瀬治郎 1997 「オジブエ語の親族名称体系」『専修国文』61:1-15.
- 中本正智 1981 『図説琉球語辞典』東京：力富書房金鶏社.
- Nerlove, S. & A.K. Romney 1967 Sibling terminology and cross-sex behavior, *American Anthropologist* 69: 179-187.
- 沖縄古語大辞典編集委員会(編)1995 『沖縄古語大辞典』東京：角川書店.
- Öztopçu, K. et al. 1996 *Dictionary of the Turkic languages*. London: Routledge.
- Radcliff-Brown, M.A. 1922 *The Andamans Islanders*. New York: The Free Press.

- Saltarelli, M. 1988 *Basque*. London: Croom Helm.
- Sapir, E. 1918 Yana terms of relationship, *University of California Publications in American Archaeology and Ethnology*, Vol.13, No.4: 153-173.
- 1920 Nass River terms of relationship, *American Anthropologist* 22: 261-271.
- Scheffler, H.W. 1978 *Australian kin classification*. Cambridge Univ. Press.
- 柴田武 1967 「語彙体系としての親族名称—トルコ語・朝鮮語・日本語」『アジア・アフリカ言語文化研究』1: 1-19.
- 1978 『日本方言の語彙—親族名称・その他』東京:三省堂.
- Shintani, T. & Zh. Yang 1990 *The Mun language of Hainan Island*. Tokyo: ILCAA.
- Sohn, Ho-Min 1994 *Korean*. London: Routledge.
- 杉村孝夫 1978 「八丈島の親族語彙」『柴田 1978』: 61-80.
- Swanton, J.R. 1940 *Linguistic material from the tribes of Southern Texas and Northeastern Mexico*. Smithsonian Institution: Bureau of Ethnology, Government Printing Office, Washington.
- 田村すず子 『アイヌ語沙流方言辞典』東京:草風館.
- Taylor, C. 1985 *Nkore-Kiga*. London: Croom Helm.
- Testart, A. 1996 *Parenté australienne: étude morphologique*. Paris: CNRS editions.
- Trask, R.L. 1997 *The history of Basque*. London: Routledge.
- Tryon, D.T. (ed.) 1995 *Comparative Austronesian dictionary: an introduction to Austronesian studies*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Turner, R.L. 1966 *A comparative dictionary of the Indo-Aryan languages*. Oxford University Press.
- 梅田博之 1991 「韓国語の親族名称」『言語』20-7:60-61.

Warner, W.L. 1933 Kinship morphology of forty one North Australian tribes, *American Anthropologists* 35: 63-86.

Wells, E.R. & J.W. Kelly 1890 *English-Eskimo and Eskimo-English vocabularies*. Washington: Government Printing Office.

Worth, D.S. 1969 *Dictionary of Western Kamchadal*. University of California Publications in Linguistics.

Wurm, S.A. & P. Mühlhäusler 1984 *Handbook of Tok Pisin (New Guinea Pidgin)*. Canberra: Pacific Linguistics, Australian National University.

山田隆治 1963 「ムンダ族の親族名称」『民族学ノート(岡正雄教授還暦記念論文集)』: 104-123.

Zhukova, A.N. 1967 *Russko-korjanskij slovar'*. Moskva: Sovjetskaja Enciklopedija.

——— 1980 *Jazyk Palanskix Korjakov*. Leningrad: Nauka.

## Sibling Terminologies of the World's Languages —Their diversity and universals—

Katsumi MATSUMOTO

This paper is an attempt of *typology of sibling terms* based on the data from about 1,500 languages of the world.

The writer establishes the twelve major types of sibling terms really attested in the data as follows (with the number of examples in the bracket):

- 1) Type A: with single neutral-generic term (83).
- 2) Type B: with two terms based on the relative age alone (165).
- 3) Type C: with three terms composed of relative age and absolute sex only distinctive on the elder side (171).
- 4) Type D: with four terms composed of relative age and absolute sex distinctions equally distributed (242).
- 5) Type E: with two terms based on absolute sex alone (282).
- 6) Type F2: with two terms based on cross sex, i.e., the same or opposite sex (59).
- 7) Type F3a: with three terms composed of cross sex and absolute sex only distinctive on the same sex (57).
- 8) Type F3b: with three terms composed of cross sex and absolute sex only distinctive on the opposite sex (19).
- 9) Type F4: with four terms composed of cross sex and absolute sex distinctions equally distributed (24).
- 10) Type G3: with three terms composed of cross sex and relative age only distinctive on the same sex (135).
- 11) Type G4: with four terms composed of cross sex, relative age only distinctive on the same sex and absolute sex only distinctive on the opposite sex (118).

12) Type Gm: with more than four terms based on cross sex, relative age and absolute sex (124), which can be divided into (a) the complex multi-term type (=Type Gm-a) and (b) the integrated multi-term type (= Type Gm-b).

Type Gm-a includes several subtypes, such as:

- a-1) Gilyak type: type C combined with cross sex two terms, namely 'brother of woman' and 'sister of man',
- a-2) Algonquian type: type C combined with cross sex two terms, namely 'same sex sibling' and 'opposite sex sibling',
- a-3) Navajo type: type D combined with various cross sex terms.

Type Gm-b comprises many minor subtypes, namely:

- b-1) Seri-Dakota type: with maximum eight or seven terms based on cross sex, relative age and absolute sex almost equally distributed.
- b-2) Nosu-Kayabi type: with six terms consisting of relative age and absolute sex four-term distinction on the same sex and absolute sex two-term distinction on the opposite sex.
- b-3) Greelandic type: with six terms consisting of relative age two-term distinction on the same sex combined with absolute sex and relative age four-term distinction on the opposite sex.
- b-4) Burmese type: with six terms consisting of absolute sex two-term distinction on the elder side and cross sex and absolute sex four-term distinction on the younger side.
- b-5) Ainu-Yupik type: with five terms consisting of type D plus cross sex distinction in the younger sister.
- b-6) Otomi type: with five terms consisting of type C plus four-term cross sex distinction on the elder side.

Generally, each of the sibling terminologies belonging to the type Gm is rare and sporadic, occurring only in the restricted areas. They may be regarded as

transient and unstable types mostly resulting from changes of terminology systems, particularly the type G3 or G4 shifting to the type C and/or type D. These changes seem to have taken place on a large scale especially in the languages of the Pacific rim including those of circum-Japan-sea area and also of North America.

Finally, the universals concerning the sibling terminologies can tentatively be formulated as follows:

- 1) In the sibling terminologies based on relative age and absolute sex, the sex distinction is preferred always on the elder side.
- 2) In the languages with grammatical gender (masculine vs. feminine), the possible sibling terminology is almost always the type E.
- 3) In the sibling terminologies based on cross sex and absolute sex, the cross sex has always priority over the absolute sex.
- 4) In the sibling terminologies based on cross sex combined with relative age, the relative age distinction occurs only on the same sex.
- 5) The optimal number of sibling terms does not exceed four.
- 6) In the sibling terminologies with cross sex as primary component, all or part of the terms necessarily exhibit mirror-image (or reversive) distribution between male and female speakers, whereas in the terminologies based only on the difference of the sex of speaker, the distribution of terms is only complementary between male and female speakers.

matsmoto@jade.dti.ne.jp